楽浪土城址の発掘とその遺構

——楽浪土城研究その1——

谷　　豊　信

はじめに

朝鮮民主主義人民共和国の首都平壌（ピョンヤン）に，前漢から西晋にかけて設置された楽浪郡に関係する土城と多数の墳墓が存在することは以前から注目されている。第二次大戦以前は日本人研究者により，戦後は現地の朝鮮人研究者によって考古学的調査研究が進められてきたが，従来の研究の関心は主に墳墓に向けられており，墳墓の被葬者の活動の場であったと考えられる大同江南岸の楽浪土城の研究は墳墓のそれに比して遅れていると言わざるを得ない。土城では1935（昭和十）年と37（昭和十二）年に，当時の朝鮮古蹟研究会による3回の調査が原田淑人・駒井和愛両博士を中心として行われた。その成果は公表されてはいるが，遺構・遺物の記述はあまりに簡潔である。戦後も何度か発掘は行われているらしいが，正式の報告はまだ無い。最近朝鮮民主主義人民共和国の研究者から，楽浪郡は中国の遼東地方に置かれたのであり，平壌の遺跡は楽浪郡とは無関係の朝鮮半島固有の人々が残したものとする説が強く主張されている[1]。一方大韓民国や日本の北九州では楽浪郡地域との密接な交渉を物語る資料が増加している。こうしたなかで楽浪土城の遺構と遺物に関する具体的な情報が切に求められている。現地の研究者による最新の研究成果の発表が待たれる訳であるが，我々としては日本に残されている戦前の資料を再発掘再検討し，そこからより多くの情報を引き出すことも当面の重要な課題といえよう。

東京大学文学部考古学研究室（以下本研究室と呼ぶ）には1935，37年に行われた3回の発掘調査の出土遺物千点余りと記録の一部が，早稲田大学文学部には駒井博士個人の資料が保管されている。筆者はこれらをもとに35・37年に発掘された遺構と遺物を紹介し，あわせて若干の考察を試みようと思う。しかし原田・駒井両博士をはじめ発掘に直接参加された方々はすでにみな物故され，当時の記録も完全に残っている訳でもなく，また筆者は現地を訪れたことすらない。正確を期し得ない点が多いが，現時点での出来うる限りのまとめを行いたい。

本稿では土城内の遺構に関する従来の記述の補足を行うが，その前に土城の概要と最近の研究状況を紹介し，末尾に土城の遺構に関する若干の考察を付け加える。出土遺物については次の機会報告する予定である。

谷　豊信

(1) 土城の概要と研究史

楽浪土城は平壌市楽浪区域土城洞（戦前の行政区分では平安南道大同郡大同江面土城里と助王里にまたがる）に存する（図1）。

平壌は朝鮮半島西北部を西南に流れる大同江中流にあり，古くからこの地方の中心地として栄えた。現在の市街地は旧平壌府に当る大同江西北岸とその対岸の旧船橋里東大院里一帯にひろがる。一般に大同江の北側は山が迫り平地が少ないが，東と南はピョンヤン準平原と呼ばれる標高10～30m位のなだらかに起伏する平地がひろがる。土城はこの丘陵地帯の中の標高58.8mの五峯山から北へのびた台地が大同江に面した部分にある。背後に平地を控え，水運に便利で，周囲よりやや高く，水害のおそれが無い（図版1—1）。土城の南には東西8km，南北4km の範囲（旧地名では西は長梅里，南は南井里，東は将進里まで）に土城に関連すると思われる墳墓が二千基以上存在する。

土城の規模については戦前の日本人の見解と最近の現地の研究者による記述の差があり，筆者を当惑させている。そこでこの問題の紹介も兼ねて，土城の調査研究史を簡単にまとめてみたい。

土城は1913（大正二）年に発見され，以後関野貞博士を中心として踏査と測量が行われた。文献8はその集大成であり，土城の総括的研究としては戦前に出された唯一のものである。これによれば土城の概要は以下の通りである。

城壁は土築で西面・南面・東南隅が比較的良く残っている。東北方面の城壁はほとんどその痕跡がみられないが，周囲の形勢から大体の規模を知ることができる。図2の太線は関野博士の推定による城壁である（土城は大体東西700m，南北600m，面積は約31万㎡である[2]）。城内は中央西寄りの標高23mの地点を最高所とし，ゆるやかに起伏している。土城内の各所より土器，瓦塼等の遺物が出土するが，中央東寄りの西北——東南方向の長方形台地（本稿では中央台地と仮称する）の東南と東北の斜面には遺物が特に多く，「楽浪礼官」「楽浪富貴」「千秋万歳」「大晋元康」などの文字瓦当や「楽浪太守章」封泥などが見出された。これらにより，土城内に少なくとも西晋の元康年間（西暦291～299年）には楽浪郡治に関係する重要な建物が存していたことが想定されるに至った。

土城内の最初の本格的発掘調査は本稿で扱う1935，37（昭和十，十二）年の調査である。この後，1944（昭和十九）年には，その前年に発足した楽浪研究所による調査が行われた。土城内の2箇所に小トレンチが掘られ，中央台地の南で塼敷き遺構が発見されたというが，記録と遺物は敗戦時にすべて現地に残されたため，今ではその詳細を知ることができない[3]。

土城の外の状況については，一部の研究者により土城東方一帯に古瓦が分布していることが注意された。関野貞博士はこれを平壌遷都以前の高句麗瓦とされたが（文献7，350頁），梅原末治博士はこれを楽浪郡時代のものとして一般の住居があったものと推定された（文献1，60頁）。しかし今は具体的なことがよく判らず，従って土城とその東方の地域との関係も不明である[4]。

土城の沿革に関しては，前述のように土城発見当初より，ここが少なくとも楽浪郡時代の末期で

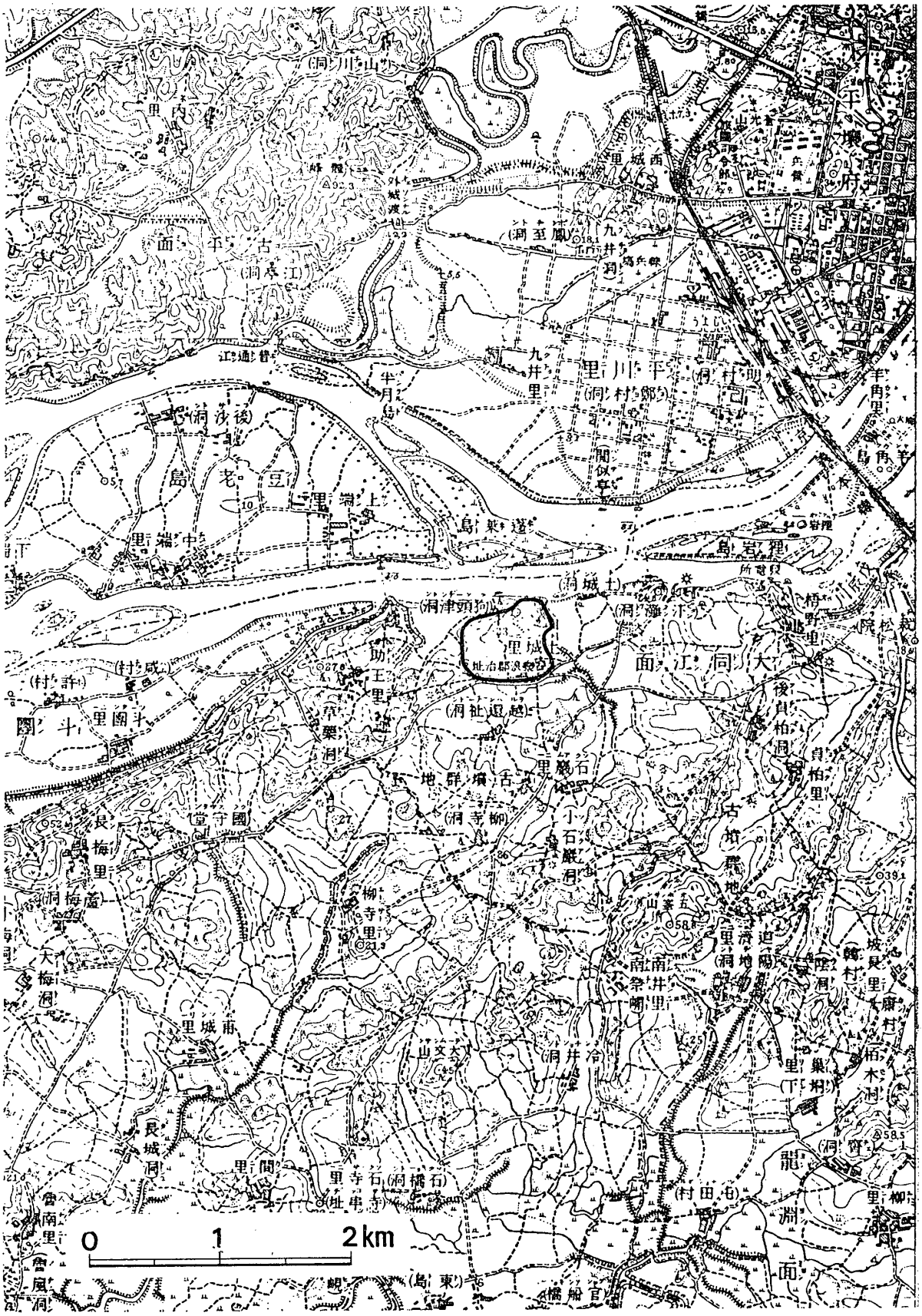


図 1　楽浪土城の位置（戦前の地図による，縮尺 1/5万）

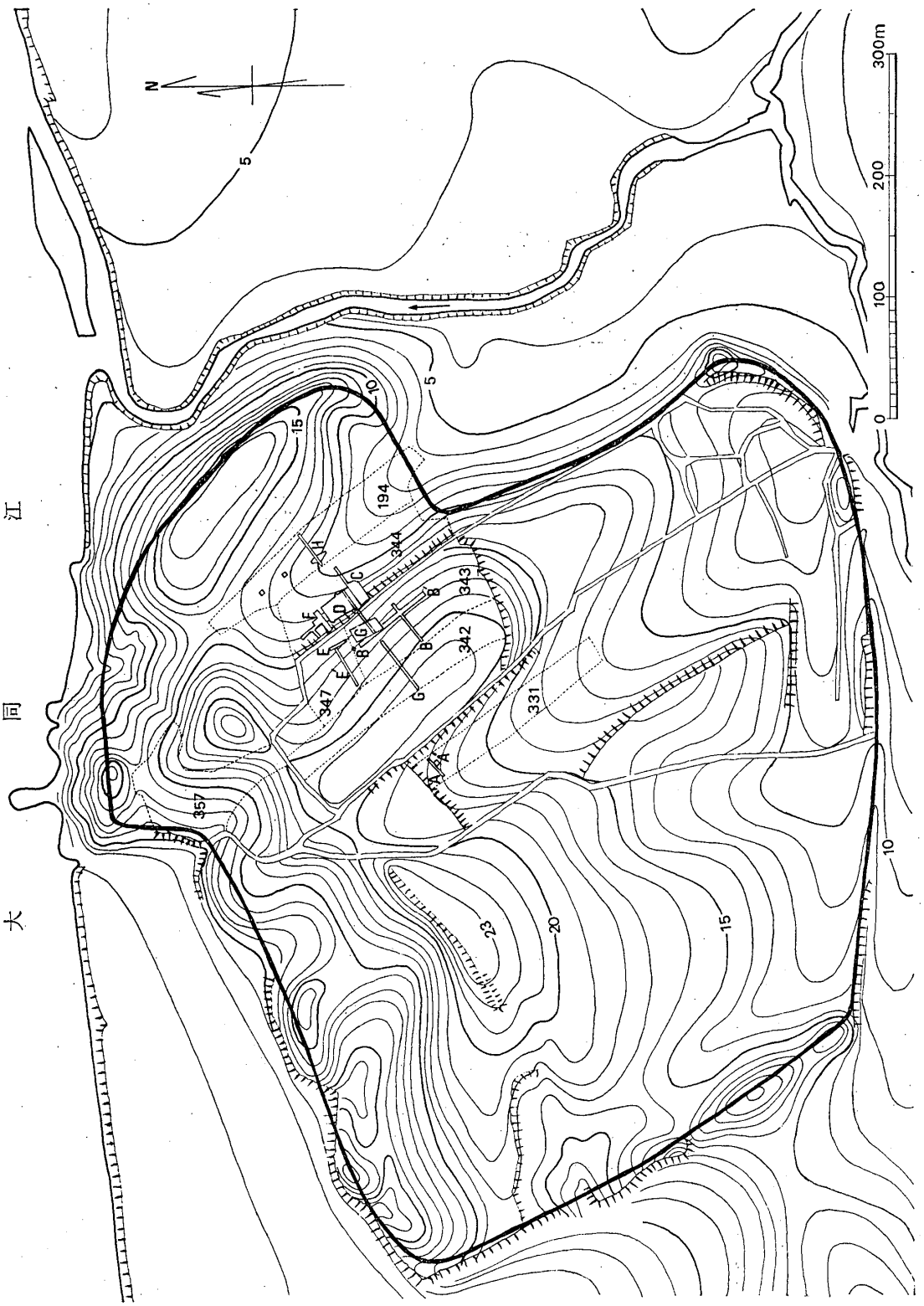


図 2　楽浪土城の地形と1935年，1937年の発掘区（縮尺 1／6000）

ある西晋の頃の楽浪郡治であることは一般に認められていたが，ここが前108年の郡設置以来の郡治とする説と後に他から移ってきたとする説が対立していた。議論の中心は郡治の沿革にあり，土城そのものの築造廃棄の年代や土城の性格などに関する考古学的分析は，当時の東アジア考古学全体の水準の制約もあって充分に検討されることがなかった。

敗戦後，楽浪遺跡の調査は現地の朝鮮人研究者の手に委ねられた。そして以後70年代初に至る20数年間は，朝鮮考古学全体で大きな成果があげられたにもかかわらず，この土城について論じられることはほとんどなかった。

日本では1965（昭和四十）年に駒井博士によって文献5がまとめられた。戦前の土城研究を結実させた研究であったが，郡治の年代に関する新説もなお鉄案というに至らず（文献10），また遺構・遺物の報告も今日の水準からみれば簡潔に過ぎ，いくつかの遺構と遺物の多くは報告されずに残った。

この間朝鮮民主主義人民共和国では，楽浪郡を平壌とする従来の説と，これを遼東とする説の間で議論が行われていた（文献16）。そして1973年に後者が強く主張され（文献18），以後これが同国の学界の定説となってから，楽浪土城に関する断片的記述がみられるようになり，同国の研究状況が僅かながら知られるようになった。

ここでまず注目されるのは，土城の規模に関する記述が従来の見解と大きく異なっているらしいことである。最近の文献から土城の規模に言及したものを訳出すると次のようになる。

①最も大きい楽浪土城にしても一辺の長さが400m未満であり……（文献18，82頁，文献15a，31頁）

②大きさ：周囲約800m（文献18，82頁；文献15a，32頁）

③……土城洞の土城は一辺が350～400mで全長が約1.5kmである。（文献20，118頁）

④大体方形のこの土城の城壁の一辺の長さは200mをはるかに越える。（文献21，65頁）

⑤……大体方形の城壁の一辺の長さは200mをはるかに越える。（文献22，80頁）

⑥……周囲が約1.5kmで……（文献23，161頁）[5]

一読して気づくようにこれらには喰い違う点があり，すべての記述を一つにまとめて理解することは困難である。あるいは一辺約200m，周囲約800mとする説と一辺350～400m，周囲約1.5kmとする説があり，これが混乱して紹介されているのではないかとも想像される。いずれにせよ，これでは戦前に発掘の行われた中央台地東北と，戦前の日本人研究者によって確かなものと認められていた東南隅と西面の城壁跡を囲むことはできない。

戦後も何回か調査が行われたという（文献18，110頁；文献15a，44頁）が，内容が伝えられているのは1968年の調査である。「1968年に封泥がもっとも多く出たという土城の東側の台地を300㎡ほど発掘したが封泥はひとつも出てこなかった」（文献18，153頁；文献15d，60頁）という。地点は1935，37年に発掘の行われた中央台地東北の一帯であったのだろうが，正確な場所は報じられていない。この時の成果であろうが，土城は単一の文化層をもち，その時期は土城をとり囲んでいる

木室墓と塼室墓の時期（後1～3世紀）であり，これに先行する土壙墓時期の遺物は1点もみつからなかったという（文献18，158頁；文献15a，44頁）。土城内に井戸が3箇所あるという記述も散見される（文献18，83頁；文献15a，32頁；文献20，118頁；文献23，161頁）。戦前の調査で発見された井戸は1箇所であるから戦後新たな井戸の発見があったことがわかる。

もう一つ注目されるのは，平壌において楽浪土城に先行する土城が捜し求められていることである。楽浪土城の年代は現地研究者により1～3世紀と考えられているのであるが，彼らによれば土城周辺に存在する前1世紀およびそれ以前の墓葬の被葬者が営んだ土城が別にあるはずだというのである。そして「土城の東北約800mの所にそれらしい土城とみられる所があるが未調査である」（文献18，110～111頁；文献15a，44頁）ともいう。これは関野貞博士や梅原博士の述べられた古瓦の散布地域を指すものと思われ，大いに注目される所である。もっともこれより新しい文献20では「（平壌に楽浪土城以前の）官庁があったことは疑いない。当時の確実な官庁址が発見されないのは調査が及んでいない結果とも思われるが，同時にそれは当時にはまだ行政体系がそれ程細分されていなかったことを物語るものとも見られる」（117頁）とし，少なくとも文献20の段階までは楽浪土城東方に楽浪土城に先行する土城があるとする予想は裏づけられてはいないことが想像される。

このような土城とその周辺の考古学調査の成果は，楽浪土城を楽浪郡址とする従来の説に立つ者にも見のがしえない問題を提起していると筆者は考えているが，ここでは特に論じない。

以上述べたように，土城自体の研究は甚だ遅れていて，城壁の規模すら確かでないという心細い状態である。中央台地東北に政治と祭祀に関係する重要な建物があったと想像される他には，この土城の内外にいかなる施設があり，政治・軍事・経済・文化の諸活動がどこでどのように行われたのか，全く不明である。土城が多数の一般住民の住居を取り込んだ所謂城郭都市であるのか，主に統治機構のみから成るものであるか興味がもたれるが，これについても今後の調査を待つ他は無い。楽浪土城に関する研究状況はおおむね以上の通りである。

(2)　1935・37年の調査

朝鮮総督府の外郭団体であった朝鮮古蹟研究会は1935（昭和十）年4月9日～30日，同年9月6日～10月18日，1937（昭和十二）年5月29日～6月26日の三回（以下それぞれ一次・二次・三次調査と呼ぶ）にわたり，楽浪土城内で発掘調査を行った。調査は当時の東京帝国大学文学部原田淑人助教授が主査となり，同学部駒井和愛副手が現場の中心となった。このほか当時の朝鮮古蹟研究会，平壌博物館，東京帝室博物館などから沢俊一・田窪真吾・野守健・滝遼一・高橋勇の諸氏が参加された。また人夫として現地人を連日数人から数十人雇った。取り上げられた遺物は（恐らくほとんどすべて）日本へ運ばれ，本研究室に保管されることとなった。

発掘の状況を伝えるものとしては，文献5，6，9，12，13が出版されている。このほか本研究室に遺構実測図とそのトレース図，発掘周辺の地籍図の写し，発掘時に撮影したガラス乾板がそれぞれ若干あり，早稲田大学文学部には第二次と第三次調査の際の駒井博士の野帳と博士個人蔵の写

真ネガシートフィルムおよび写真焼付が保管されている。調査日誌らしいものは現在残されておらず，また図面もすべてが残されている訳ではないが，これらにより従来の報告を若干補足することが可能である。（以下，駒井博士の野帳を単に＜野帳＞と呼ぶことにする。従来の報告の主なものは文献5，12，13であるが，文献12，13の内容はほとんどそのまま文献5に収められている。特に異なる点がないかぎりこの三つの文献の記述を＜報告＞と呼ぶ）

発掘地点は図2に示した。図中の3桁の数字は＜報告＞に記された地籍番号である。一次調査の当初地籍357の官有地を試掘したがここは10cmの深さで岩盤に達したので発掘を中止し，次に中央台地一帯に試掘を行なってここを本格的に発掘することにしたのであった。地籍331のAトレンチ以外はすべて中央台地東北側の斜面に当る（図版2）[6]。ここは関野貞博士以来，文字瓦当や封泥の出土地として知られた所であった。

発掘されたトレンチおよび区域は更に小さい区画に区切られ，これを記録や遺物注記の単位とした。＜野帳＞によって知られる発掘当時の区画は＜報告＞の記述よりも細かい所がある。この方が遺物の出土地点がより明確になるので，これによって記述することにする。遺物の出土層位や出土状況に関する記録が少ないが，これは当時の水準から言えばやむを得ない所であろう。

これから発掘の順序とは無関係に西南から東北へ順に各発掘区の状況を説明する。発掘区の位置や区画の細分について図2，3，11を参照されたい。これらの図の作成に当っては，筆者の判断で線を引いた部分が少なくない。この間の事情は挿図解説に記しておいた。本稿では＜報告＞の補足を目的とし，＜報告＞に尽きている部分は敢えて繰り返さない。

1.　Aトレンチ・A′（図版3）

第1次調査。＜野帳＞は残されていない。中央台地西の窪地の北部に東北――西南方向に長さ20m，幅2mのトレンチを掘り，東北より2mずつ区切りⅠ区からⅩ区とし，またⅣ区とⅤ区の東南を4m掘りひろげた4×4mの区画をA′とした。＜報告＞に厚さ30cmの耕土の下10cmで石塊・瓦片・銅鏃などが小量出土したというのが図版3―2のトレンチ中央の部分であり，この東南にA′を設定した。遺構はなく，耕土下80cmで粘土質の地盤に達した。

2.　GトレンチⅠ～XXIV区（図版4）

第3次調査。Gトレンチは幅2m，全長80m強あるが，中間の14mほどは厚さ20cmの耕土の下がすぐ地盤となっており本格的な発掘を行わなかったので，トレンチは西南と東北の二つに分れる。西南部分は長さ48m，東北部分は長さ18mで，西南端より2mずつ区切られ，それぞれⅠ～XXIV区，XXV～XXXIII区に細分される。東北部は後述することとし，ここでは西南部のみ述べる。

発掘当初Ⅰ～XIII区は10cmの耕土の下がすぐ地山と思われたが，Ⅰ・Ⅱ区の北から井戸址が，Ⅳ・Ⅴ区で塼築の遺構が発見された。塼のなかには小口に紋様を印したものや小端に枘を造り出し

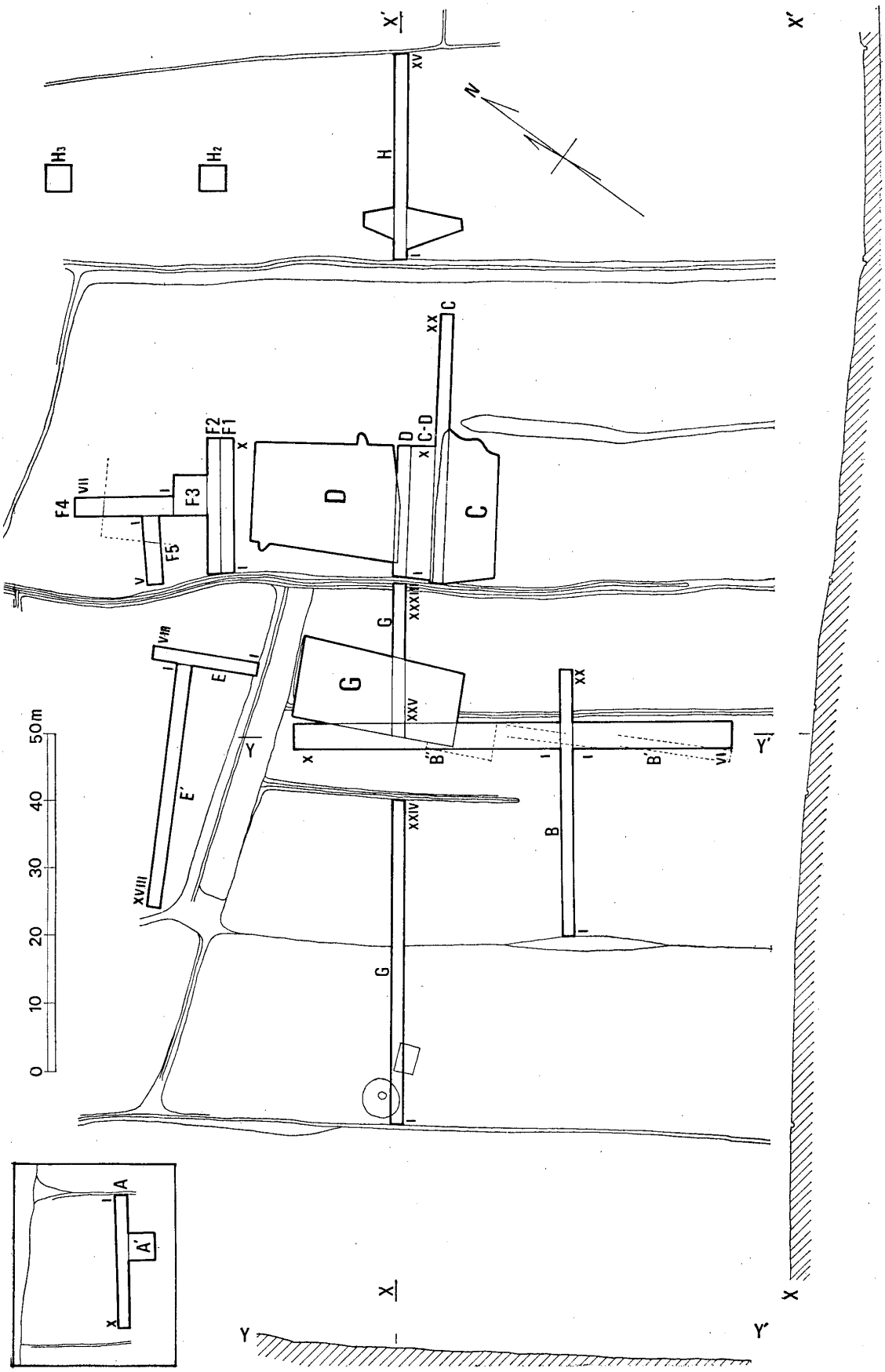


図 3　発掘区全図（縮尺 1／1000）

ているものも交えられている（図版４）。詳しくは<報告>参照。

XIV～XXIV 区の情況は<野帳>によりやや詳しく知られる。XIV～XVI 区では 30cm の耕土の下に平瓦片を包含する厚さ 60cm の層があった。XIV 区では瓦当や紋様塼も出土した。<野帳>には「平瓦の集まっている所あるは盗掘と思はれる」とある。

XVIII～XXI 区にも厚さ 20cm の耕土の下に厚さ 30cm の包含層があった。XVIII 区では地盤の上に長さ 90cm，幅 45cm の礎石と思われるものがあり，XIX 区では五銖銭が発見され，XX 区では耕土下 50cm で「周思傷印」の封泥が見出され，またこの附近で蕨手紋瓦当が２個発見された。なんらかの建物が存在したことが考えられるが，破壊されていて明らかにしえなかった。

3. B，B′，B″ トレンチ（図８，９，図版５～８）

第一次調査分であり，<野帳>は残されていない。

Ｂトレンチは西南―東北方向の長さ20m，幅２ｍのトレンチで，西南より２ｍずつ I～XX 区に分けた。詳細は<報告>参照。

ＢXV・XVI 区で塼敷き遺構が出たので，ここから直角に東南方向に幅４ｍ，長さ24mの B′ トレンチをのばして西北より４ｍずつⅠ～Ⅵ区に分け，同様に西北にも幅４ｍ，長さ40mの B″ トレンチをのばし東南よりⅠ～Ⅹ区に分けた（図８，９）。図と写真に基づく判断であるが，実際の発掘は塼や石の遺構を追う形で行われ，<報告>に記述された発掘区とはかなりずれる部分もあったようである。

塼敷き遺構

塼敷きは B′VI 区より B″Ⅱ区まで34mほど続いている。おおむね長方塼を網代に組み合せている。小端に枘を作りだした塼も少なくない。BXV 区，B″Ⅰ・Ⅱ区にかけては塼敷きの西端に大理石を積んでいる（図版５―１，２）[7]。

建　物　址

この北のB″Ⅲ区からB″Ⅵ区にかけて南北10mの建物の一部らしい遺構が出ている（図９，図版７―１）。実測図や写真から判断すると塼と粗い加工を施した板石が用いられているようである。図をみる限りでは遺構内の石や塼の配列の主軸はいくつかあり，時期を異にするいくつかの遺構が重なっているようにも思える。鼎が出土したのはこの建物址の内部，B″Ⅳ区西寄りである（図９，図版６―１，２）。この建物遺構の内部を更に掘り進めていくと，鼎の出土地点の南から<報告>にいう「瓦塼を積み重ねた炕の遺址らしいもの」が見出された（図版８―１）。

溝　　址

建物址内部の B″Ⅴ区の下から北へ幅42cm，長さ20m弱（文献12，38頁）の溝らしい遺構がのびている。溝の西壁は地固めに石塊を積み，東壁は平たい板石を立てかけて土止めとしている。溝の底にも平たい板石を敷き並べている。溝が建物址の北辺と交叉する部分には，建物址のレベルに大きな板石が暗渠の蓋のように置かれている。しかしこの石は溝の底から 70cm も高い所にあり，溝

東壁の板石よりはるかに上にあり，速断はできない。建物址の北方では溝の上にやや小さい割石が集まっている（図9，図版8—2）。明渠とも暗渠ともつかず，遺構の性格は明らかでない。G区域の実測図（文献13，図版105；文献5，実測図六）[7] より，この溝はB″Ⅶ区あたりが一番高く，その両側が低くなっていることがわかる。

図版7—2をみるかぎり，溝址の西壁の石積みは建物址南部の「炕らしい遺構」まで続くようであるが，東壁に当る石はないようである。この部分に床石があるかないか記録が無いため明らかでない。

4.　Gトレンチ XXV—XXXIII 区，G区域（図4，9，図版9，10）

第3次調査の時，Gトレンチ（XXV～XXXIII 区）が B″ トレンチと重なるように（あるいは接するように）設定された。BXXV区で礎石が見出されたのでこの一帯を大きく掘り拡げることとし，これをG区域[8]とした。G区域の西辺は B″ トレンチ内建築址の北半と溝址に重なる。

文献5ではG区域西辺の（つまり B″ トレンチの）溝はG区域の遺構と同じ時期のものとしている。しかし写真（図版9—1，10—1，文献5図版四）で見ると，溝の底とG区域の礎石などの遺構がほぼ同一のレベルにあり，これでは溝の東壁の板石が浮上ってしまう。この時期の床面はもっと高く，礎石は地表下に埋め込まれていた可能性もあるが，礎石（柱）をかすめて溝が走るのもおかしく，溝と礎石は時期が異なると考える方が自然ではなかろうか。

野帳にはG区域西辺の溝とG区域南辺の溝がつながると記されているが，実測図からはその状況はよくわからない。図をみる限りでは，南辺の溝は西辺の溝とは構造を異にしていた可能性がある。

G区域には中央東寄りをほぼ南北に通る溝らしい遺構がある（図版9—2）。これは大形の板石を組み合せた溝状遺構（図4）や東西2m，南北70cmに玉石を敷きつめた遺構（図版10—2）の間を通っているが，両者との関係は明らかでない。

このように，この一帯は<報告>にもあるように大型建築址の一部であることは疑いないが，往時すでに重修改築を経，また後世その上面を破壊されて解りにくくなってしまったものと思われる。

5.　E・E′トレンチ（図版1—2）

第二次調査。Eトレンチは幅2mで長さ16m，南より2mごとにⅠ～Ⅷ区に分けた。E′トレンチはEトレンチⅦ区よりほぼ直角に西南西へのばしたもので，幅

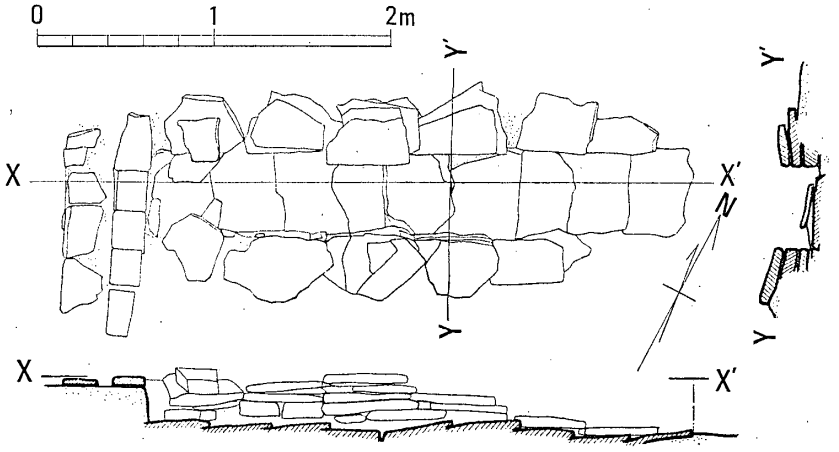


図4　G区域溝状遺構実測図（縮尺 1／50）

2m長さ36m，東より2mずつⅠ～XVIII 区に細分した。

Eトレンチでは Ⅲ～Ⅶ区に瓦片が多量に存していた。<報告>に「E′Ⅵ区からE′XVIII区の地盤上に自然石の大きなものが露出していたが，いずれも礎石とは認められなかった」というが，この状況が図版1―2である。E・E′トレンチは周辺の遺構との関係が注目されるが，特に目立った遺構は見出されなかったようである。遺物注記によると，独特の陶製高杯ないし器台（文献5，29頁の13，14）はここより集中的に出土しており，注目される。

6. C区域，Cトレンチ，C―D，Dトレンチ，D区域（図7，10，図版11～14）

C・DトレンチとC―D間は第一次，C区域とD区域は第二次調査の時に掘られた。

Cトレンチは西南より東北へ斜面を下る幅2m，長さ40mのトレンチで，西南より2mずつⅠ～XX 区に区切った。DトレンチはCトレンチの北3.6mにCトレンチに平行して設定された幅2m，長さ20mのトレンチで，これも西南より2mずつ[9] Ⅰ～Ⅹ区に区切られた。C―Dもこれを挟む二つのトレンチに対応して2mずつⅠ～Ⅹ区に区切られた。

第一次調査の際，Cトレンチ内で礎石が発見されたので，この南方を試掘し，更に第二次調査の時，CⅠ～Ⅻ区を東南方へ8m掘り拡げ，これをC区域と命名した。C区域内の発掘区の細分は<野帳>と遺物注記により以下のようだったと推定される。西南――東北方向はCトレンチⅠ～Ⅻ区の区画に対応させて2mずつ区切って1～12とし，西北――東南方向は4mずつに2分しCトレンチ側をⅠ，その先をⅡとして，4×2mの長方形の区画を1つの単位として C^2Ⅰのように表示した。

Dトレンチの北は20×28mほどの範囲を掘り，これをD区域と命名した。D地域内の区画の細分もC区域の場合と同じ材料から推定できる。Dトレンチの西北の隅を基点とし，これより東北へDトレンチに沿って4mずつ区切り1～5とし，またDトレンチと直角に西北へ4mずつ区切ってⅠ～Ⅴとし，こうしてできた4×4mの区画を一つの単位として D^2Ⅲのように表示した。これによれば発掘区全体は一辺20mの正方形となる筈であるが，実際に掘られたのは図に示す範囲であり，D^1Ⅴに当る区画は実際にはほとんど掘られなかったらしく，またD区域西北辺では一区画が逆に4×6mほどに大きくなってしまっている。

礎　石　列

CトレンチとC区域の西部では同一の建物に属すと思われる礎石が5個出土した。礎石の間隔は東北――西南方向が4.24m，西北――東南方向が5.35m[10]である。<野帳>によるとC区域の東南方には礎石の無いことが確認されている。西南側は道路になっているため調べることができなかったようである。礎石に囲まれた範囲の中には礎石の面とほぼ同一のレベルで漆喰の面と方形の塼が残っていた。

敷　　石

C区の東にも板石を敷いた所があるが，その性格は不明である（図版11―1）。

C区域・その他

C区域の南方からは滑石製の半両銭鋳型が表採されている（文献5，図版17—1）。

Cトレンチ東北部でも斜面から大きな板石や方形無紋塼が出土しているが，これについては写真が残されているだけである（図版11—2）。この写真で手前に見える大きな石は図版11—1のやはり手前に見える石である。図版11—2はCXII区からXV区位までを掘った状態であり，この先CXX区までは特別な遺構が発見されなかったことが他の写真から確認される。

塼敷き遺構

DトレンチおよびD区域南部では33×25cm程の無紋塼を敷きつめた遺構が発見された（図10・11，図版12—1・2）。塼の方向はDトレンチの方向と大体一致しており，前に記したC区域の礎石列と次に記す二号溝址とこの塼敷きの方向がほぼ一致することが注意される。

図10と図版12より，塼の面は地形に従って東北へ進むほど低くなっていることが判る。所々階段状になっている所がみられるが，<報告>にも述べられているように，この一帯の塼敷き遺構は再建改修を経たものであり，図と図版が示す情況が本来のままであるかどうか不明である。図版よりこの塼の面は以下に記すD区域内の溝址や瓦棺よりは高い位置にあったものと筆者は推測している。

河原石を敷きつめた遺構

DトレンチI区には<報告>に「I区の下に河原石を敷きつめたところがあり，その中から多量の木炭が発見された」とある箇所があり，図10に示されている。礎石の根石とも思えず性格は不明。

暗　　渠

D区域東南部には板石で作った暗渠状の遺構が2つある。南のものを1号溝址（図5，図版13—1），東北のものを二号溝址（図6）と仮称する。

一号溝址の両壁は平たい自然石を4～5層積み重ねたもので，底には方塼を敷いている。暗渠の蓋（自然石）を取り除く前の状況が文献12図版30—1であり，蓋を取り除いた状況が本稿図版13—1である。

二号溝址は床，壁ともに平たい花崗岩で構成している。二個の蓋石と溝址の南にある蓋らしい石もみな花崗岩である。二号溝址の南には他とは方向を異にする塼敷きがある。写真（文献12，図版

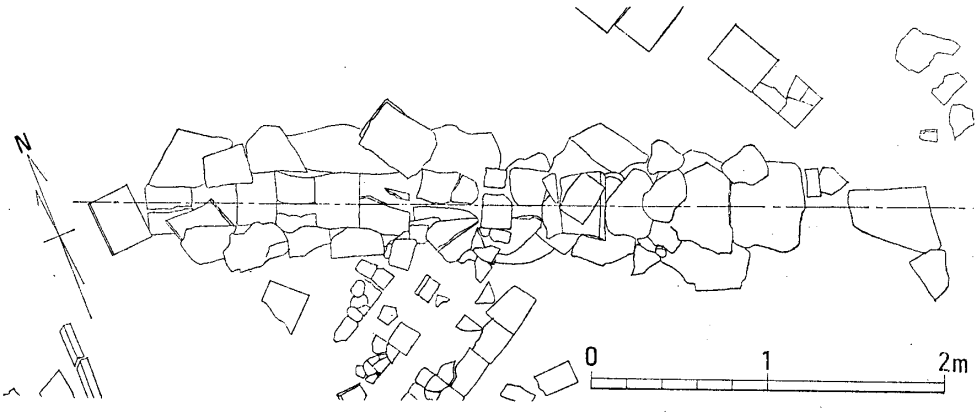


図5　D区域一号溝址実測図（縮尺 1／50）

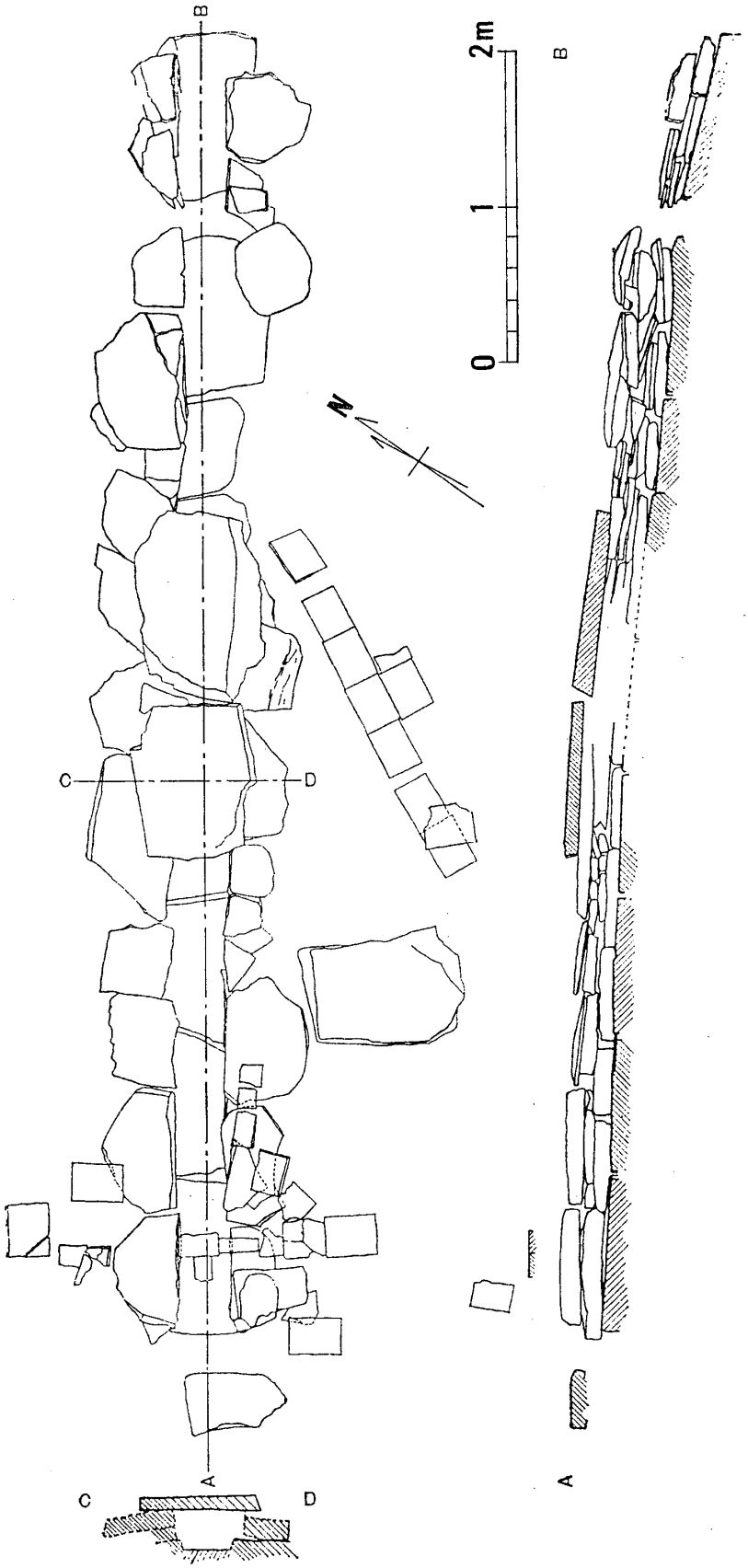


図6　D区域二号溝址（縮尺 1／50）

29—1など）によれば，これは溝の上面より低く，他の塼よりかなり低い。

瓦　棺　墓

一号溝址の西北2.5m，D^2Ⅲ 区で平瓦を利用した瓦棺が発見された（図7，図版14)。<報告>の文中では言及されていないが，文献5実測図三には描き表わされており，文献12図版30—1（或は本稿図版13—1）の一号溝址の後方に映っている。駒井博士の他の著作では簡単に触れられたことのあるものである。<野帳>には「D^2 Ⅲのうちに漢代の平瓦を利用した棺と覚しいものが出土した。墓は欠損していたが恐らく小児を葬ったものであろうが，其の属する時代は明らかでない」と記されている。図と写真から，この墓は一枚の平瓦を凸面を下にして敷き，その四辺に平瓦片を凸面を内側に向けて立てて棺の側壁としたものであることが知られる。蓋については明らかでない。<野帳>のスケッチに書き込まれたメモによると内法は南北が1.7尺，東西が1.5尺である。底に使われたと思われる平瓦は本研究室に保管されており，ほぼ完型に復原されている。長さ47cm，幅41cm，厚さ1cmで，質・製作技法は土城出土瓦では標準的なものである。この瓦は次の機会に詳しく紹介する。図版13—1などからこの瓦棺は塼敷きの面より低い所にあったことが認められる。

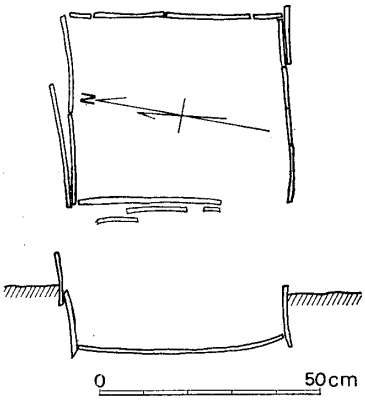


図7　D区域瓦棺墓（縮尺 1／20）

<野帳>には，上記の瓦棺墓の記述につづけて「猶 D^2Ⅱ—Ⅲ に於いては瓦鼎が多く出土したことが注目せられる。即ち漢代に於いて多く鼎を実際に使用したことが興味あるところ」と記されている。

D区域西北の礎石列

D区域西北部には礎石とみられる石が散在しているが，間隔は一定でなくレベルも異なる。<野帳>によると D^2Ⅳ から D^4Ⅳ にかけて一列に並んでいる礎石は西から二つめが青色の片麻岩であり他の三つは御影石である。同じく<野帳>によると D^2Ⅳ 区から「遂成右尉」封泥が出土した。その隣の D^3 Ⅳ では厚さ35cmの「夥しい瓦片」が発見されており，<報告>ではここが瓦葺き建物の北端と推測している。

D区域西北角の D^2Ⅴ 区には窪穴がある（図版13—2)。窪穴については<報告>参照。<報告>に「この地点上層から「官」字を陽刻した後世の瓦片その他磁器残片を発見し，このあたりに漢代以後何等かの建物があったものと考えられる」とあるのは，この D^2Ⅴ 区一帯のことである。<野帳>には「D^2 Ⅴ の深さ耕土の下50cm の個所に高麗か李朝の磁器が出土した。此の附近には一般に地盤が低くなって居て，漢代より後世の瓦片が散布して居たことも注意に値することである」とある。D^3Ⅴ 区からは耕土下80cmから鉄蒺藜，銅勺等が発見されており，<報告>にもあるように礎石列の北において楽浪郡時代には地盤が低く窪んでおり，後にここに盛り土がなされて何らかの建物が営まれたことが考えられる。

D区域は出土品が豊富であり，銅鏃や五銖銭が多数出土したことは注目に値する。またC区域からD区域南辺に封泥が集中していることも見のがせない。

7.　F区域〔図版15〕

第三次調査。<報告>ではF, F′, F″トレンチとして紹介された部分を，本稿ではまとめてF区域と仮称する。調査時には F_1〜F_5 に分けられていた。F_1 はD区域の北を西南—東北に走る幅2m，長さ20mのトレンチで西より2mずつ F_1 I 区から F_1 X 区に分けられた。F_2 は F_1 に接して掘られた幅2m，長さ20mのトレンチで，区分は F_1 と同様である（以上が<報告>のFトレンチ）。次に F_2 V・VI区の北に6×5mほどの区画を掘り，これを F_3 とした。更に F_3 の北辺西端より幅2.7m，長さ15mのトレンチを北へのばし，F_4 としてこれを南から F_4 I〜F_4 VII 区に細分した（以上が<報告>の F′ トレンチ）。また F_4 II から西南へ幅2.5m，長さ10.5mほどのトレンチを設定し，F_5 としてこれを東北からI〜V区に分けた[11]（F_5 は<報告>の F″ トレンチ）。

<報告>によれば F_1，F_2（図版15—1）からは表土下約40cmで後世の建物の礎石に利用されたと思われる平たい石が多数出土し，その下から漢代瓦当が出土している。<野帳>には「此のほかに官字を刻せる後世のものあるも，不思議なるは此の筒瓦・平瓦に伴ふ後世の瓦当の出ないことである。此の他後世のものに諸種の文様の平瓦がある」とあり，すぐ南のD区域北部と同じような状況であったと想像される。F_3，F_4，F_5 では F_1・F_2 の礎石の面より数十 cm 下のレベルで楽浪郡時代のものとみられる溝址（図版15—2）や基壇が見出された。<報告>にあるように楽浪郡時代の地盤はD区域の礎石列附近から急に低くなっており，後世この上に盛り土して建物が建てられたのであろう。

この区域で注目されるのは，発掘で出土した鏡片（後漢鏡と思われる）のほとんどがここから出ていることである。

8.　Hトレンチ

第三次調査。Gトレンチの延長線上に幅2m，長さ30mのトレンチを掘り，西南から2mずつI〜XV 区に区分した。III・IV区で塼敷き遺構がみつかったので，この南北を掘り拡げそれぞれH北，H南と命名した。Hトレンチの塼敷きは B′—B″ トレンチのものとは組み合せ方が異なる点が注目される。

Hトレンチの西北，F区域の東北に4m四方の試掘坑を二箇所掘り，南から H_2，H_3 とした。野帳には「高麗様の瓦片夥しく出土するのみで中止する事とする」とのみ記されている。

(3)　遺構に関する考察

1935・37年の調査は発掘面積もさほど広くなく，それまで封泥や瓦当の出土地として知られていた中央台地東北斜面にかなり大規模な建築物があったことを明らかにしたにとどまった。また種々

の悪条件により，発掘区域内の遺構も充分に解明されたとは言い難い。ここでは発掘された個々の遺構について筆者の気づいた点を列挙して本稿の結びとしたい。

1.　遺構のまとまり

<報告>でも指摘されているように，土城内では楽浪郡時代にも何度か再建・改築が行われ，後世にもやや大規模な工事が行われたと考えられる。また耕作や盗掘による破壊も相当のものがあったと思われ，一つの遺構の範囲を確認することすら困難である。しかし遺構の方位と遺物の分布などから，ある程度の推測は可能である。

B′—B″ トレンチの塼敷きは塼の形状や敷き方が楽浪郡時代の塼槨墓と同じであり，塼槨墓が盛行した時期のものとみてよいであろう。

B″ トレンチ内の建築遺構は報告ではその南の塼敷きと同じ時期のものとされている。この建築址では石や塼の方向が幾通りかあるようで，一時期のものではないかも知れないが，塼槨墓や塼敷きに用いられたのと同じ長方塼が多数使われているので，少なくとも遺構の一部が南の塼敷きと同じ時期のものであることは充分に考えられることである。

この建築遺構からG区域にかけての遺構は複雑で，幾つかの時期のものが入り乱れているようである。遺構の高さからみるとG区域の遺構の多くはB″ トレンチ内の建築遺構より古いものと考えられる。G区域では長方塼が少なくとも多用はされなかったことも注意すべきであろう。G区域西辺の溝が上の二つのどちらかに属するものか，あるいはその中間の時期に入るものであるかについては判断の材料が乏しい。

C区域西側の礎石とD区域の二号溝址および塼敷きの大部分は方向が大体同じである。塼敷きの部分で再建が確認されているからすべて同一時期のものとは言えないが，その大部分が同じ時期のものである可能性はあるであろう。塼は方形に近い無紋塼でB′—B″ トレンチのものとは異なる。礎石もG区域のものとはやや趣きを異にしている。

D区域北半から F_1，F_2 にかけては，後世比較的大規模な土木工事の行われたことが考えられる。D区域北半の礎石は間隔やレベルが一定でなく，これ自身の性格も周辺の遺構との関係も不明である。形態だけとってみればG区域のものよりもC区域のものに似ている。

F区域の F_4，F_5 トレンチにあらわれた基壇と思われる遺構は<報告>にある通り一連のものであろう。これと F_3 の溝址の関係は不明である。

以上のように推定される遺構のまとまりと遺物の分布には興味深い対応がみられる。駒井博士は「CD トレンチ，CD 区域は BB′B″ トレンチなどよりも古いものを出している」（文献5，9頁）と述べられた。詳しくは遺物を紹介する際に触れるが，封泥とりわけ官印とみられるものはC区域からD区域南辺に集中し，銅鏡片はF区域に集中し，銅鏃は主にD区域より，五銖銭はD区域とF区域から出土するなどは顕著な現象である。また土器などの分布にも偏りが認められる。このように遺物の検討を通じて遺構の性格や時期をいくらかでも知ることができそうである。

2.　方位について

発掘された遺構には特に真北を意識したとみられるものはなく，西南から東北へ下がる傾斜に合せて適当に方位を定めたようである。楽浪郡の存続した時期の中国の建物や墳墓は一般に主軸を南北または東西とすることが多く，楽浪郡地域の墳墓も大体そうであることからすれば，土城内の建物の方位は地形の制約によるやや特殊な例であったと考えたい。

3.　礎石について

発掘された礎石はすべて自然石か自然石に若干の加工を加えた程度のものであり，西安の漢代大型建築や後の高句麗の宮殿址や寺院址にみられるような丁寧な加工を施したものは無い。しかし漢長安城内の武庫遺跡などは自然石に若干の加工を施した程度のものを使っており（文献32），楽浪土城内の礎石がこの時期のものとしては特に粗末であったとは言えないであろう。

礎石の形態についていえば，C区域，D区域にみられる礎石は上面を平らに加工した一辺数十cmの割石を用いているのに対して，G区域のものは上面が平らな一辺1mほどの自然石を用いているようである。石材も違うように思われる。これらの差意は注意すべきであろう。

礎石の状況は明らかでないが，C区域のものは漆喰面とほぼ同じ高さにあり，暗礎ではなかったと思われる。

柱間が確実に知られる例はC区域とG区域にしかない。<報告>によればC区域西南の5個の礎石は東北――西南方向が平均4.24m，西北――東南方向が5.35mであり，G区域の例は南北方向が4.24mである[12]。前出の武庫遺跡や内蒙古自治区ホフホト市郊外の美岱古城の漢代大型建築址（文献30）などでも建物の長軸方向の柱間は4m強，これと垂直の方向の柱間は5m強である。これが当時の建物の一つの規準であったとすれば，C区域西南の礎石はこれとよく合致していると言えよう。武庫でも美岱故城でも建物がかなり細長かったことからすれば，礎石列が未発掘の西南方向に延びる可能性もあると言えよう。

4.　溝状遺構について

土城内には溝状の遺構が多いのに注意される。種々の形態がみられるが，G区域とD区域にみられる大きな板石を積んだ現長数mから10m程度のものと，より小さな板石や割石を用いた F_3 トレンチやG区域の溝址は区別する必要があるかも知れない。

これらには雨落ちの溝や排水関係のものもあろうが，調査者である駒井博士が炕である可能性を検討されたのは注目に値する。炕・オンドルの祖形とされる遺構は平安北道寧辺郡竹里第三層（古代層，戦国時代末の頃）や鴨緑江上流の初期高句麗遺跡（1～2世紀ごろとされる）で発見されている。これらは形態からみて後の高句麗や渤海の宮殿建築の炕の祖形と考えられ，この種の施設が東北アジアの諸民族の間で用いられていたことが知られている（文献17）。これらと土城内の溝状遺構の形態はあまり似ていないが，冬寒い平壌で建物内に本格的な暖房施設を造っていたことは充分に考えられ，今後の調査・研究が待たれる。

5.　瓦棺墓について

D^2Ⅲ区で発見されたような平瓦を組み合せて棺とする墓は楽浪郡地域だけでなく，中国の華北

にもみられる。一般に副葬品をほとんど持たないので年代の判定が難しいが，瓦の形状や周囲の状況から漢代もしくはやや下るものと考えられている。

最近土城の東南約 1 km の楽浪郡時代の古墳群の中で，木槨墓や塼槨墓などに混って2基の瓦棺墓（貞柏洞26号墓，同64号墓）が発見された（文献24)。「棺は2基とも長方形土壙内に幅広い平瓦を一揃い敷き，その上にやはり平瓦をかぶせ，両端に一枚の瓦を立てて塞いだものである。瓦はすべて縄目紋瓦である。瓦棺は長さ 200cm，幅60cm であった。棺内には副葬品はなかった」という。土城発見のものより大きく成人用かと思われる。

黄海南道殷栗郡雲城里古墳群（文献19）にも平瓦を利用した墓葬がある（16，17号墓)。16号墓は半楕円形の墓壙を掘り，底に平瓦を一揃い敷いて屍体を安置し，その上へまた平瓦を一揃い覆せたものである。両端は塼を積み重ねて塞いでいる。長さ70cm，幅35cm で小児用とみられる。これに用いられた平瓦は「普通長さ20cm，幅15cm，厚さ1.5cm」という。破片の大きさであろうが，本来完形の瓦が埋葬後に砕けたのか，はじめからこのような小片で死体を覆ったのか報告からは判然としない。17号墓は口径120cm，底径100cm，深さ100cm の墓壙の上面を平瓦片で覆うもので，瓦棺墓とはいえない。

中国本土では西安・洛陽および内蒙古ホリンゴールの漢成楽県城址の例が報告されている。西安では市の東郊の白鹿原漢唐墓葬群の中で1基発見された。2枚の大きな平瓦を重ねただけのもので小児用とみられる。瓦の形状と副葬された琉璃製耳飾から漢代のものと推定される（文献27)。洛陽では東周王城の内外で10基以上の報告がある。完形の平瓦を上下に重ねその間に死体を納めるものであるが，平瓦の数は上下各1枚ずつから各6枚ずつまで各種の大きさがある。また両端を塼や平瓦でふさぐものもある。多くは年代を確定しがたいが，年代のわかるものは層位や副葬品から後漢もしくはそれ以降とされる（文献26，28，29)。

内蒙古自治区烏蘭察布盟和林格爾（ウランチャブ　ホリンゴール）県の漢成楽県城とされる土城内では，1943年に駒井博士らが瓦棺墓を1基発掘した（文献2，3，4)。図版16はおそらくこの時のものと思われる。1960年の中国側の調査でも同じ土城内から「児童用瓦棺」が出たという（文献31)。

まだ具体例は少ないが，華北では漢もしくは漢をやや下る時期に，平瓦を棺材とした児童および成人用の質素な墓が墓地内や土城内に作られたのであり，楽浪土城例をはじめとする西北朝鮮のほぼ同時代と考えられる瓦棺墓もその形態や立地からみて全く同じ性格のものと考えられる。換言すれば，少なくとも瓦棺墓に関しては華北と西北朝鮮の間に差異は認められない。

土城や土城内の建築遺構が当時の東アジアの集落や建築のなかでどのような特色を持つかという点は興味深い問題であるが，対比しうる資料は現在でも意外に少ない。今回の資料整理を通じて明らかとなったのは，土城内の礎石と瓦棺墓のあり方が当時の中国北部のそれとかなりの類似性をもつということ位である。これが直ちに楽浪土城や楽浪郡をめぐる最近の議論に影響するものとは思わないが，注意すべきことであると考える。　（1983年7月30日）

楽浪土城関係の資料整理を始めてから多くの方々の御支援を受けており感謝にたえません。本研究室資料に関しては渡辺仁先生，上野佳也先生と今村啓爾，安斎正人，山浦清の各氏，早稲田大学文学部の駒井資料に関しては桜井清彦先生，菊池徹夫先生，内田順子さんの御配慮を賜わりました。戦前の楽浪調査については小泉顕夫先生，中村春寿先生から，戦後の整理については吉田章一郎先生，倉田芳郎先生，田中一郎氏，藤江稔氏から御教示を賜わりました。調査当時の真北の推定には本学理学部浜野洋三氏の御世話になりました。また全体を通じて関野雄先生と田村晃一先生から御教示・御助言を賜わりました。記して謝意を表します。

註

1) 文献18（この後半部分の忠実な訳が文献15）以来，同国ではこの説が定説化しているが，その論拠には問題が多い（文献11）。またこの説が成り立つためには，中国東北地方の漢から西晋にかけての郡県の比定も従来の説を大幅に改めなければならないが，この点についてはこれまでほとんど触れられたことがない。鴨緑江北岸の中国遼寧省丹東市に漢の遼東郡西安平県とみられる土城が存する（文献33）ことから，筆者は，遼東郡は遼寧省東部，楽浪郡は西北朝鮮とする従来の説は基本的には動かしえないものと考えている。
2) （ ）内の数字は文献6，67頁による。なお文献14，5頁に面積約十二万五千坪(約41万平方メートル)とあるが図でみる限りそれ程の広さがあったとは思われない。
3) 発掘に参加された小泉顕夫先生と中村春寿先生の御教示による。
4) 関野貞ほか1927高句麗時代之遺蹟図版上冊所収の瓦当をみる限りでは，土城里周辺出土の瓦には輯安出土の古式の高句麗瓦当に近いものがみられることは確かである。梅原博士の論拠を筆者はまだ確認していない。
5) 文献25には楽浪墳墓の記述はあるが土城の規模は記されていない。
6) 文献5図版1—2も本稿図版2とほぼ同じ地点から撮ったものである。文献5の図版目次一に「東壁から中央台地を望む」とあるがこれは「北方から」の誤り。
7) 文献5図版目次二の「B′トレンチ内発見（南方より撮影)」は，「北方より」の誤り。
8) 挿図解説の図4の項参照。
9) 文献5，40頁に「三メートル」とあるのは誤植。
10) ＜報告＞には5.5m とあるが，文献5実測図三に記された数値と図から算出される距離はともに5.35mである。
11) F区域の各トレンチの大きさに関する数値は＜野帳＞，＜報告＞，遺構全体図の間で喰い違いがみられるが，ここでは遺構全体図より算出した値を用いた。F_4・F_5 トレンチの区画細分は野帳にも記述がなく，遺物注記によって判断した。
12) この他にGトレンチ西南の塼築遺構の規模が4.24×3.17mであったことを考え合せると，土城内では4.24mという長さが建築の一つの規準であったことが考えられる。当時の1尺が23cm前後であった（文献34）ことからすれば，これは23.5cm強を一尺とした18尺＝3歩なのではないかとも想像される。しかしこれですべてが割り切れる訳ではなく，C区域礎石列の5.35mやGトレンチ塼築遺構の3.17mという数値は1.5尺＝1/4歩という単位を導入しなければ理解できない。また他の漢代建築でも数値がすべて尺の整数値となるよう設計施工されているとは思えないので，これには尚一層の検討を要する。

挿図解説

本稿の挿図を作成するに当って問題となったのは方位である。1935・37年の調査では，磁北によって記録

と報告が行われた。1935年頃の平壌の偏角は約6°w（東京大学理学部浜野洋三氏の御教示による）であり，本稿では磁北より6°東へ振った方位を真北とみなしてこれを基準にして作図した。本稿の挿図でNを付した方位がこれである。実測図に記入されている磁北は，やや短かい線で何の記号もつけずに表した（図2～7，11)。方位の記入の無い実測図にもとづく図は，遺構全体図等から求められる方位（真北）のみを図示した（図8～10)。

図1：朝鮮総督府1918年発行の五万分の一地図「平壌西部」「岐陽」より作成。

図2：文献8a，本研究室蔵の地籍図の写し，遺構全体図（300分の1）などから作成。文献8aの図に示されている方位は，総督府発行の二万五千分の一地図等との対比から磁北と判断した。図の等高線は大正時代のものだが，調査時も大きな変化はなかったと思われる。但し等高線とトレンチとの関係は，全くの机上の作図であるため，参考にとどまる。

図3：本研究室蔵の遺構全体図（300分の1）より作成。但し B′・B″ トレンチ内外の遺構とG区域の区画は筆者が修正した。この点は図8・9の項を参照。

図4：本研究室蔵のG区域遺構トレース図（20分の1。これは文献5実測図六と文献13図版105の版下である。文献13の図は問題がないが，文献5の図は約120分の1であるにもかかわらず約100分の1のスケールがつけられている）より作成。

図5：本研究室蔵のC・D区域遺構トレース図（20分の1。文献5実測図三の版下）より作成。

図6：文献5実測図四より作成。

図7：野帳のスケッチ（10分の1）より作成。

図8・9：本研究室蔵 B′・B″ トレンチ実測図（20分の1）およびG区域トレース図（前出）より作成。前者にはBトレンチとの交叉部にのみ B・B′・B″ トレンチの幅を示す鉛筆書きがあるのみで，その他の部分にはトレンチの位置や発掘区の細分，実際に掘った部分の外周を示す線は記入されておらず，磁北の記入もなかった。図示したトレンチの区画は，筆者がBトレンチとの交叉部に記入された線を延長し<報告>の記述に従って発掘区を細分したものである。実測図にはG区域の図と重なる石が数個指示されており，これと遺構全体図から求められるトレンチの方位にもとずいて二つの図を重ね合せた。遺構全体図に示された（したがって従来の報告に図示された）遺構の位置と B′・B″ トレンチ実測図では塼敷きの長さが異なり，前者の方が4mほど長い。また上述の方法で B′・B″ トレンチ実測図とG区域の図を重ね合せると，G区域全体と B′ トレンチ側の塼敷きの南端が遺構全体図よりそれぞれ4mずつ北へずれる。B・B′・B″ トレンチの交叉部の指示はこの図の他の部分とは書き方が異なり，恐らく文献13の作成時に書き込まれたものと思われ，その時Bトレンチの位置を本来より1区画分4m東南に記入してしまったものと推定される。このように訂正すれば B″ トレンチ内の建築遺構が従来の遺構全体図より4m東南へ移る他はおおむね妥当な位置にくるのでそのように作図した。図3にも修正後の位置を示してある。

図10：本研究室蔵Dトレンチ実測図（20分の1）及びC・D区域遺構トレース図（前出）より作成。

図11：遺構全体図（300分の1，前出)，本稿図8・9・10，<報告>などにより作成。遺構全体図に示されたG区域の区画内にはG区域の実測図の遺構を収めることができない。ここでは遺構実測図に合せて区画を東と南に2～3m拡張して描いた。C・D区域一帯の区画は野帳の記載にもとずいて筆者が線引きした。西北辺の区画が長いのは窪穴発掘のため拡張したものと思われる（野帳と遺物注記からⅥという区画は設定されなかったものと思われる)。F区域の F_3・F_4 トレンチの幅については<野帳>，<報告>，遺構全体図に喰い違いがみられるが，ここでは遺構全体図に従った。

図版出典

本研究室蔵のガラス乾板によるもの

図版10—2，11—2，16—1・2

楽浪土城址の発掘とその遺構

早稲田大学文学部蔵の駒井博士個人のシートフィルムによるもの
図版9－1，14—1・2
他はすべて早稲田大学文学部蔵の駒井博士個人の写真焼付による。

文　献

〔日本文〕
1. 梅原末治『朝鮮古代の文化』1946，京都
2. 駒井和愛「中国西北ホリンゴルの漢成楽県址」『曲阜魯城の遺蹟』（考古学研究　第二冊）1951，東京，附録1～7頁
3. 同上「六朝以前の墳墓」『中国古鏡の研究』1953，東京，195～224頁
4. 同上「乳幼児の甕棺墓」『人類科学』9（同『中国考古学論叢』1974，東京，280～285頁，再録）
5. 同上『楽浪郡治址』（考古学研究　第三冊）1965，東京（同『中国都城，渤海研究』1977，東京，85～119頁，再録）
6. 同上『楽浪——漢文化の残像——』1972，東京
7. 関野貞「高勾麗の平壌城及び長安城に就いて」『史学雑誌』第39編第1号，1928（同『朝鮮の建築と芸術』1941，東京，345～370頁，再録）
8. 関野貞ほか『楽浪郡時代の遺蹟』（古蹟調査特別報告　第4冊）京城
   a　図版，上冊・下冊，1925
   b　本文，1927
9. 高橋勇「本年度楽浪土城発掘概況」『考古学雑誌』第27巻第8号，1937，東京，547～550頁
10. 田村晃一「楽浪郡治小考——駒井先生と朝鮮考古学——」『貝塚』10，1973，東京，10～12頁
11. 同上「楽浪郡地域出土の印章と封泥——馬韓の文化への反論」『考古学雑誌』第62巻第2号，1976，東京，115～124頁
12. 原田淑人，駒井和愛「昭和九年度同十年度土城址の調査」『古蹟調査概報　楽浪遺蹟　昭和十年度』1936，京城，33～47頁
13. 原田淑人，高橋勇，駒井和愛「楽浪土城址の調査（概報）」『昭和十二年度古蹟調査報告』1938，京城，103～115頁
14. 原田淑人，田沢金吾『楽浪』1930，東京
15. リ・スンジン，チャン・ジュヒョプ（金享圭ほか訳）「馬韓の文化」『朝鮮学術通報』東京（文献18後半部分の訳）
   a．1　12巻2号，1975，31～44頁
   b．2　12巻3号，1975，44～55頁
   c．3　12巻4号，1975，42～48，53頁
   d．4　12巻5・6号，1975，60～66頁
   e．5　13巻1号，1976，27～38頁

〔朝鮮文〕（発行地はすべて平壌）
16. 都宥浩「王険城の位置」『文化遺産』1962年第5号，60～65頁
17. 鄭燦永「我国のオンドルの由来と発展」『考古民俗』1966年第4号，15～24頁
18. 李淳鎮・張ジョヒョプ『古朝鮮問題研究』1973（この後半部分の訳が文献15）
19. 李淳鎮「雲城里遺跡発掘報告」『考古学資料集』第4集，1974，200～227頁
20. 社会科学院考古学研究所『古朝鮮問題研究論文集』1977
21. 社会科学院歴史研究所『朝鮮文化史』1977
22. 同上『朝鮮通史（上）』1977

23.　社会科学院考古学研究所『朝鮮考古学概要』1977
24.　社会科学院考古学研究所田野工作隊『考古学資料集』第5集，1978
25.　社会科学院歴史研究所『朝鮮全史　3（中世篇高句麗史）』1979
〔中国文〕（発行地はすべて北京）
26.　郭宝鈞ほか「一九五四年洛陽西郊発掘報告」『考古学報』1956年第2期，1～31頁
27.　俞偉超「西安白鹿原墓発掘報告」『考古学報』1956年第3期，33～75頁
28.　中国科学院考古研究所『洛陽中州路（西工段）』（中国田野考古報告集　考古学専刊　丁種第4号）1959
29.　河南省文化局文物工作隊「一九五五年洛陽澗西区小型漢墓発掘報告」『考古学報』1959年第2期，75～94頁
30.　内蒙古自治区文物工作隊「1959年呼和浩特郊区美岱古城発掘簡報」『文物』1961年第9期，20～25頁
31.　同上「和林格爾県土城址試掘記要」『文物』1961年第9期，26～29頁
32.　中国社会科学院考古研究所漢城工作隊「漢長安城武庫遺址発掘的初歩収獲」『考古』1978年第4期，261～269頁
33.　曹汛「霾河尖古城和漢安平瓦当」『考古』1980年第6期，566～567頁
34.　国家計量総局『中国古代度量衡図集』1981

Monument of Lê-lang Provincial Office, Pyongyang, North Korea

Toyonobu Tani

108 B. C., China (Western Han dynasty) sent troops to northern Korea and conquered Old Korean Kingdom (古朝鮮). In order to rule the new territory, China established four provinces (郡) : Chen-fan (眞番), Lin-t'un (臨屯), Lê-lang (樂浪), and Hsuan-t'u (玄菟). Soon former two provinces were abolished and Hsuan-t'u was moved to inner region. Only Lê-lang alone remained intact in the northwest of Korea until the fourth century A. D., and influenced the formation of ancient culture in Korea and Japan. Lê-lang culture is one of the keys to study ancient culture in the East Asia.

In 1935 and 1937, Yoshito Harada and Kazuchika Komai carried excavations at the site of Lê-lang provincial office in Pyongyang, North Korea (Harada et al 1936, 1938, Komai 1965). Since then, the site has been investigated for several times. But compared with the importance of the site, the published reports are too brief. Recently the author found unpublished but important records on the excavations by Harada and Komai. In this paper, using new material the author reorganizes the information of the monument which was excavated by them and points out some characteristics on the site, and makes discussions about them. The descriptions of the excavated finds which have been preserved in University of Tokyo will be published elsewhere.

I. the Site

The site is located on the height on the southern bank of Taedong river, southwest of urban area of Pyongyang (fig. 1). The site, which was discovered in 1913, is enclosed by a mud wall with irregular plan. It measures about 700 meters east-west, 600 meters north-south, and its area is about 31 hectares (fig. 2). In the center of the enclosure, there is a rectangular hill extending from northwest to southeast. Many relics have been collected in its southern and northeastern slopes since the site was discovered. Among the finds, the eaves-tiles inscribed with "Ta-Chin-Yuan-K'ang (大晉元康)", "Lê-Lang-Li-Kuan (樂浪禮官)", and seal-clays inscribed with "Lê-Lang-T'ai-Shou-Chang (楽浪太守章)" indicate that there stood some important buildings of Lê-lang provincial office at least in the era of Yuan-k'ang (元康 : 291-299 A. D.) in Western Jin dynasty.

In 1935 and 1937, Yoshito Harada and Kazuchika Komai carried excavations. In 1943, Japanese archaeologists carried investigations in the site, but the records were left in Pyongyang when they left there after World War II. Korean archaeologists have made investigations in the site, but the details of their archaeological studies on this site have not been fully published.

II. Excavations in 1935 and 1937

In 1935 and 1937, the site was investigated for three times: March in 1935, from September to October in the same year, and from May to June in 1937. In these seasons, several test trenches and excavation areas were dug. All the trenches and excavation areas except trench A were located in the northeastern slope of the central hill (fig. 2, 3, Pl. 2).

The outlines of each trench and area are as follows.

Trench A-A′ (Pl. 3): Several stones, roofing tiles and bronze arrow heads were found.

Trench G (west part): In the western part of this trench, a round water well and a brick structure were found. The diameter of the well is 1.35 meter, and its wall was constructed from brick which is the same as that of brick chamber tombs of Lê-lang period. The brick structure is almost rectangular in plan, 4.24 meters east-west, 3.17 meters north-south, and 1 meter deep. (Pl. 4)

Trench B-B′-B″ (fig. 7, 8): In trench B, B′ and south part of trench B″ was discovered brick pavement which is about 35 meters long and 4 meters wide. The brick is 31 centimeters long, 16 centimeters wide, and 6 centimeters thick. The shape of the brick is as same as that of the brick chamber tombs of Lê-lang period (Pl. 5). In the middle of trench B″ were found stones and bricks which represent a building. The area of these stones and bricks is 10 meters long and 4 meters wide. In this area, a bronze ding (鼎) was discovered (Pl. 6, 7, 8-1). In the northern part of trench B″ was found a ditch constructed from slabs. The ditch is about 20 meters long and 42 centimeters wide (Pl. 8-2).

Area G (fig. 10): This excavation area is in the east of trench B″. There are some stone post bases, a ditch constructed from slabs, and pebbles which are placed to fill a rectangular area (2 meters long and 0.7 meter wide), etc. (Pl. 9, 10)

In trench B-B′-B″ and area G, there were large buildings, but they were rebuilt several times during Lê-lang period, and were destroyed in after age.

Trench E-E′: Only some relics were found in these trenches (Pl. 1-1).

Area C, trench C, C-D, trench D and area D (fig. 10): In the west side of area C, five stone post bases were found (Pl. 11-1). The floor among five stone post bases was mor-

tared. In the east part of trench C, some slabs and bricks were found (Pl. 12-2). Between trench C and trench D, some relics were found, but no structure was discovered. In trench D and south side of area D, brick paving was found. The brick is 33 centimeters long and 25 centimeters wide. The condition of paving indicated that the pavement had been rebuilt during Lê-lang period (Pl. 12-2). Under the level of this brick paving, two blind ditches constructed from slabs (Pl. 13-1) and a tomb were discovered. The coffin of the tomb was made from roofing tiles which were used in Lê-lang period (Pl. 14). In the northern part of area D, several stone post bases and pit were found (Pl. 13-1).

Area F (fig. 10): The southern part of area F and northern side of area D were destructed by rebuilding of the later age. In the northern part of this area, the north and west edge of house foundation were found. This foundation is datable to Lê-lang period.

Trench H: Brick paving was found. The brick is rectangular. Paving pattern is different from that of trench B-B′-B″. In the two test pits in the north of trench H, only roofing tiles of the later age were found.

III. Discussion

In this chapter, the author concentrates on some problems concerning the site. Through the arguments, it is confirmed that Lê-lang and contemporary North China had some common features as regards architecture and burial.

1. Most of the excavated structures are datable to Lê-lang period. On the basis of the directions of the structures and distribution of finds, it is possible to estimate more exact data of each structure. It is certain that the structures in area C and southern part of area D are earlier than the brick pavement in trench B-B′-B″ and brick structure in trench G.

2. Unlike the contemporary Chinese architecture, none of the excavated structures point to the north or east. The author estimates that Lê-lang structures' case was exceptional and was caused by the topographical condition.

3. Excavated stone post bases indicate that the buildings of Lê-lang were similar to those of contemporary North China.

4. Some of ditches may be a part of heating facility such as those in the Koguryo (高句麗) palaces and temples (or such as Roman hypocaust).

5. The coffin of roofing tiles are similar to those in North China and Lê-lang province during Han dynasty and a little bit later.

Literature cited

Harada, Y et al 1936 Showa 9 nen oyobi 10 nendo dojo shi no chosa, *Showa 10 nendo koseki chosa gaiho*, Keijo, Chosen koseki kenkyu kai (The society of the Study of Korean Antiquities)

Harada, Y et al 1938 Rakuro dojo shi no chosa (gaiho), *Showa 12 nendo koseki chosa hokoku*, Keijo, Chosen koseki kenkyu kai (The Society of the Study of Korean Antiquities)

Komai, K 1965 Rakuro gun chi shi, *Kokogaku kenkyu* 3, University of Tokyo, Institute of archaeology.

Lists of Plates

1-1 : Distant view of the walled enclosure (view from southwest)
2 : Trench E′ (view from west)
2 : View of site (view from north)
3-1 : Trench A (view from northwest)
2 : Trench A (view from southeast)
4-1 : Brick structure in trench G (G IV-V) (view from northwest)
2 : the same
5-1 : Brick pavement in trench B-B′-B″ (view from west)
2 : the same
6-1 : Remain of building in trench B″ (B″III-IV) (view from north. There is a bronze ding in the center of it)
2 : Bronze ding in situ
7-1 : Remain of building in trench B″ (view from south)
2 : the same
8-1 : Brick structure in the building in trench B″ (B″III-IV)
2 : Trench B″, north side
9-1 : Area G (view from southwest)
2 : Area G (view from north)
10-1 : Area G, west side
2 : Pebbles in the rectangular area
11-1 : Area C, east side (view from northwest)
2 : Trench C (C XII-XV) (view from southwest)
12-1 : Trench C, C-D, and trench C (view from northwest)
2 : Brick paving in trench D
13-1 : Ditch 1 in area D
2 : Pit in area D
14-1 : Coffin made from roofing tiles in area D (D^2III)
2 : the same
15-1 : Trench F_1, F_2 (view from east)
2 : Ditch in trench F_3 (view from north)
16-1 : Coffin made from roofing tiles at Horinger, Inner Mongolia, excavated in 1943 by Kazuchika Komai
2 : the same

Lists of Figures

1. Lê-lang provincial office site and its vicinity (before World War II)
2. Plan of the site and areas of excavations in 1935 and 1937
3. Whole plan of excavated areas
4. Ditch in area G
5. Ditch 1 in area D (D^2II-D^3I)
6. Ditch 2 in area D (D^4II-D^5II)
7. Coffin made from roofing tiles in area D (D^2III)
8. Brick paving in trench B-B′-B″ (B′II-B″I)
9. Remain of building and ditch in trench B″ (B″II-B″X)
10. Brick paving in trench D (DI-VII)
11. Layout of the main structures

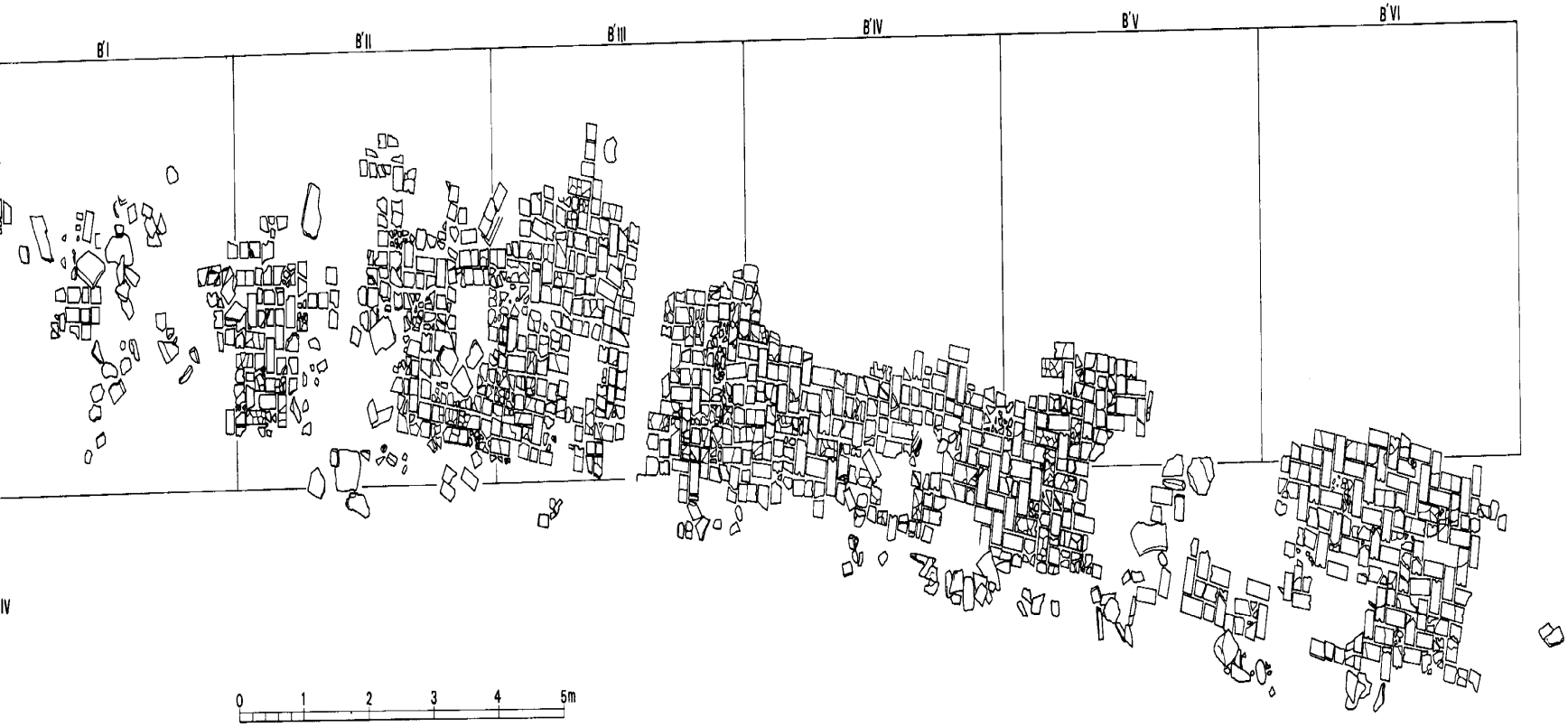


図8　B'－B'トレンチ実測図(縮尺1/50)

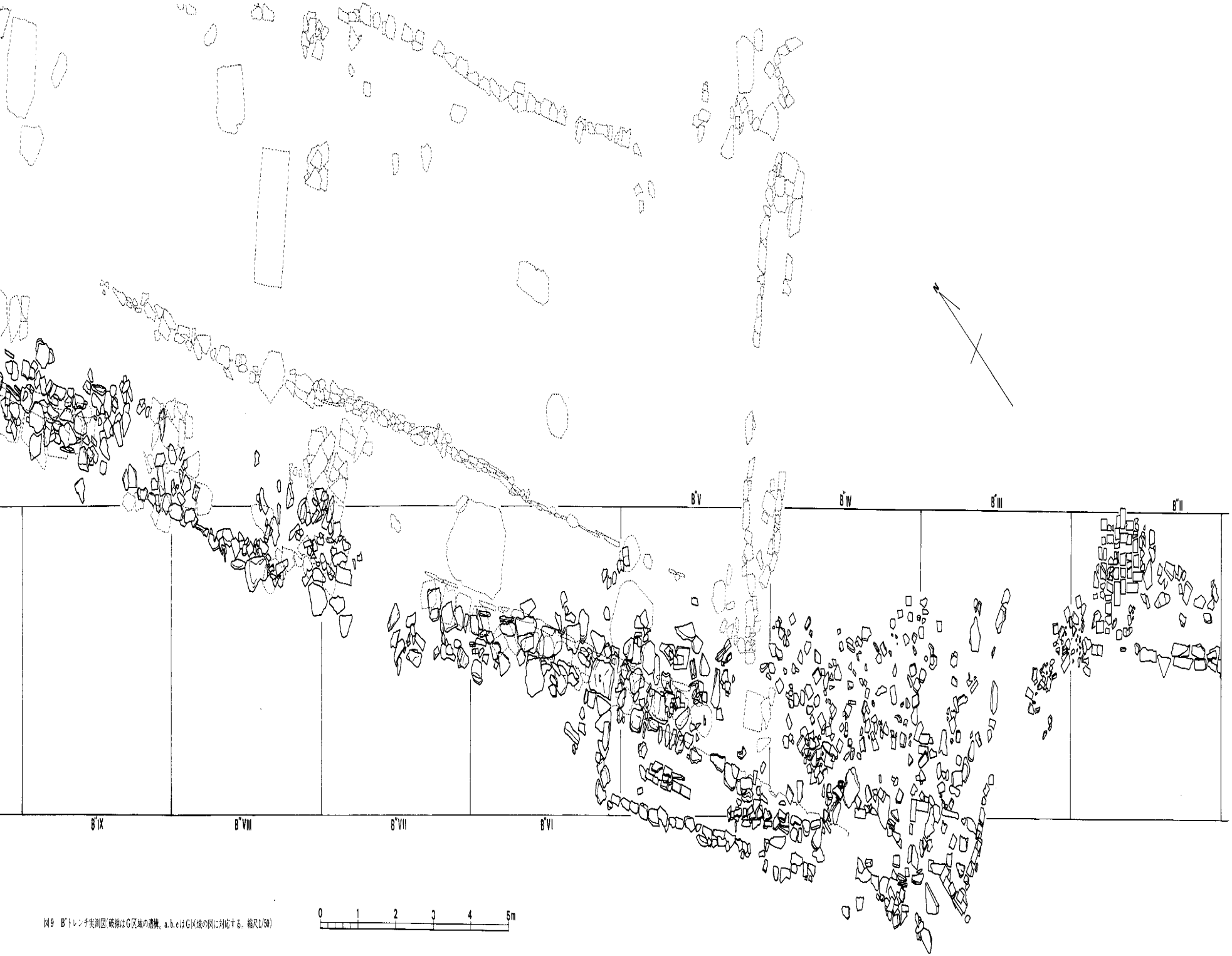


図9 B"トレンチ実測図(破線はG区域の遺構, a.b.cはG区域の図に対応する。縮尺1/50)

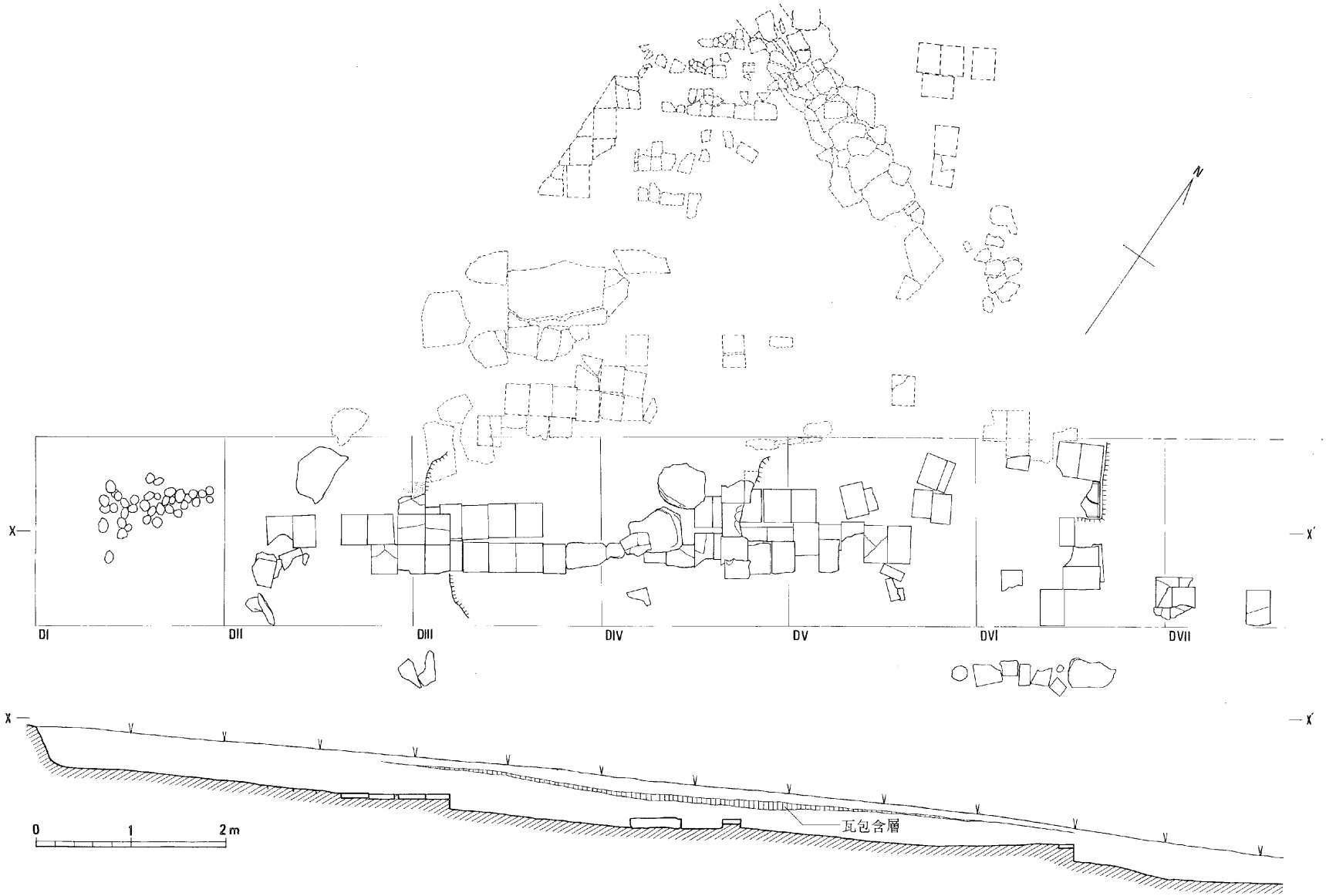


図10　Dトレンチ実測図(破線はD区域の遺構を示す。縮尺1/50)

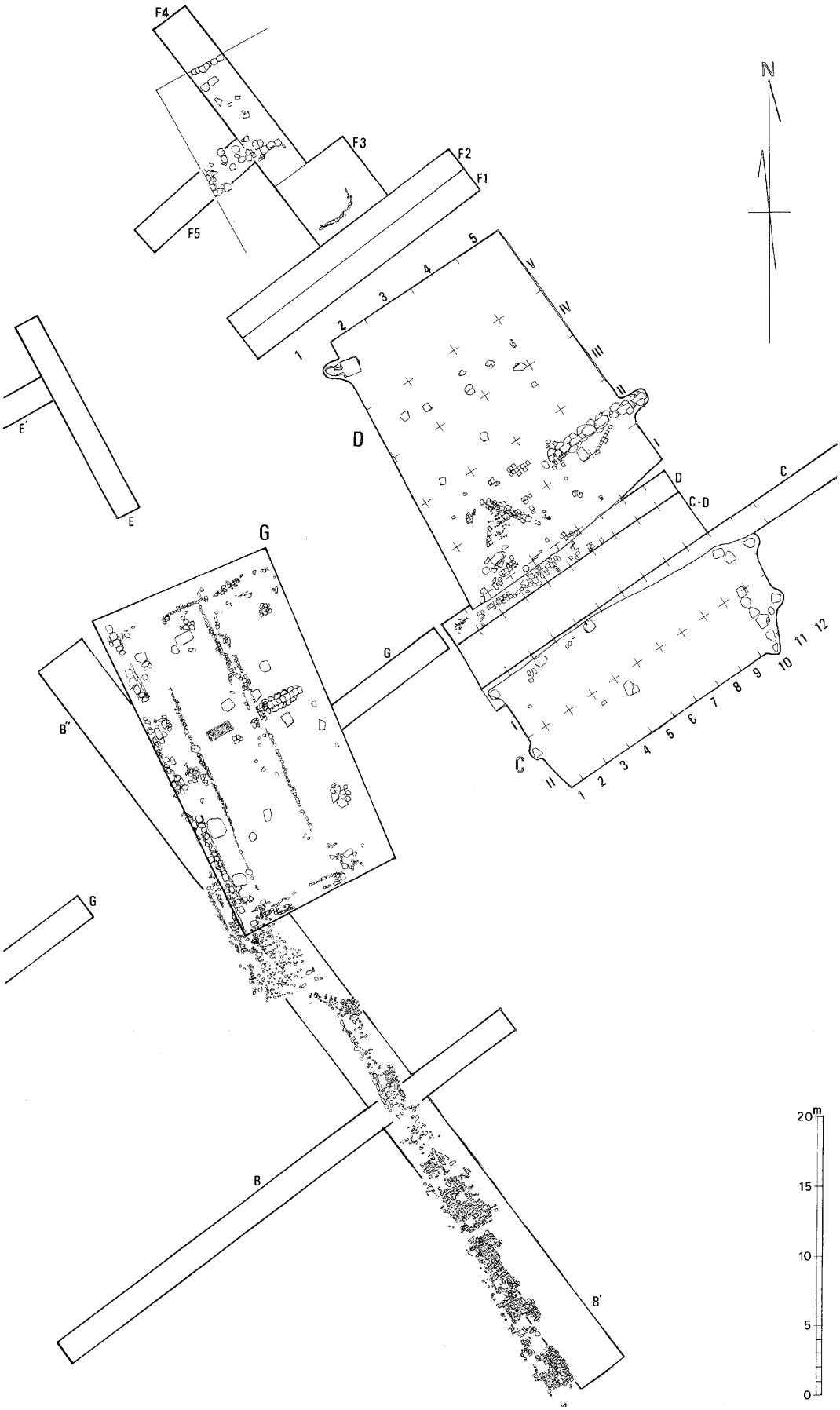


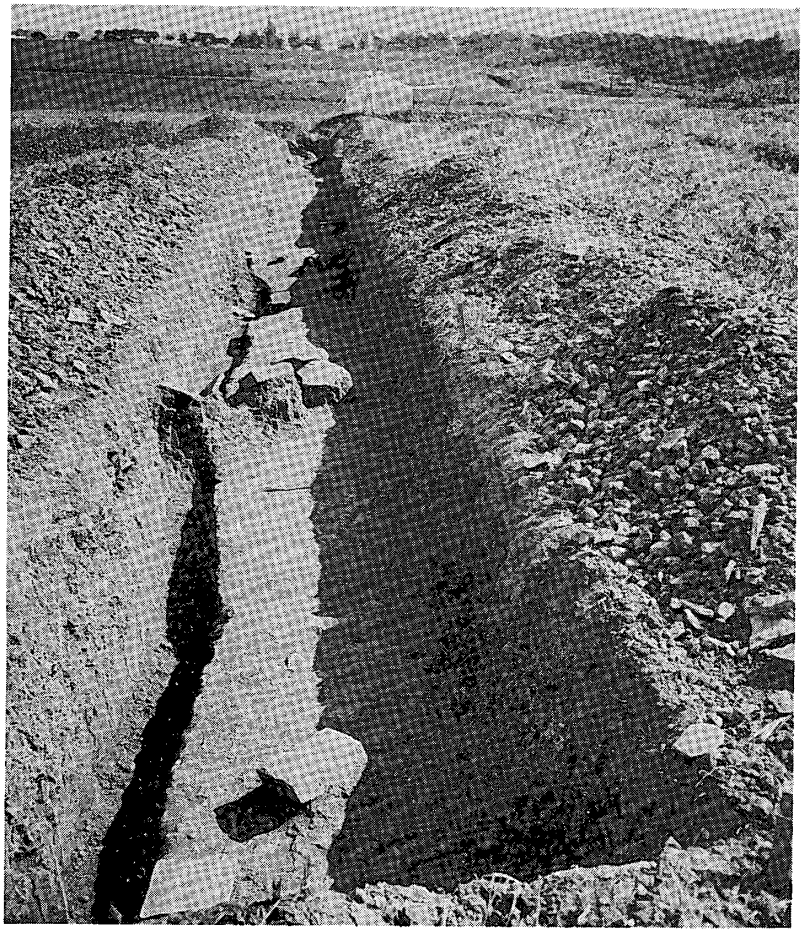
図11　主要遺構の配置(縮尺1/300)

楽浪土城址の発掘とその遺構

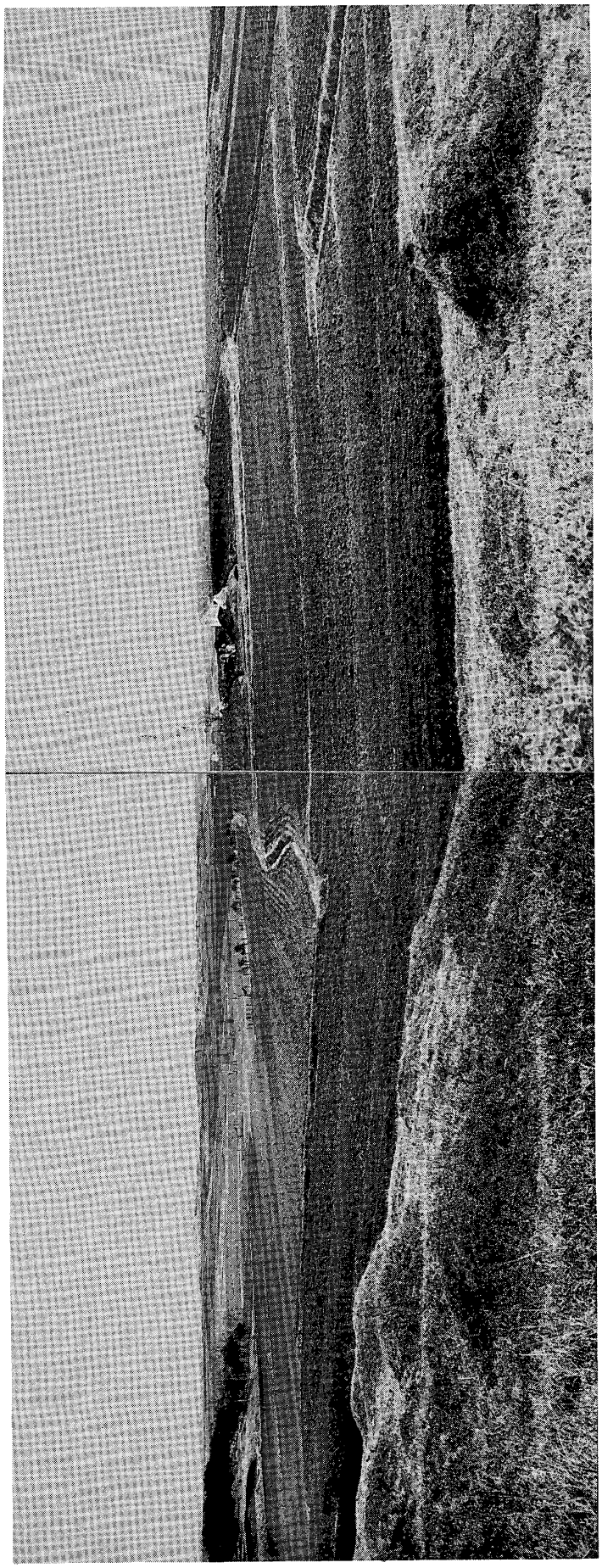
（図版１－１）

１．楽浪土城遠望（東南より）

（図版１－２）

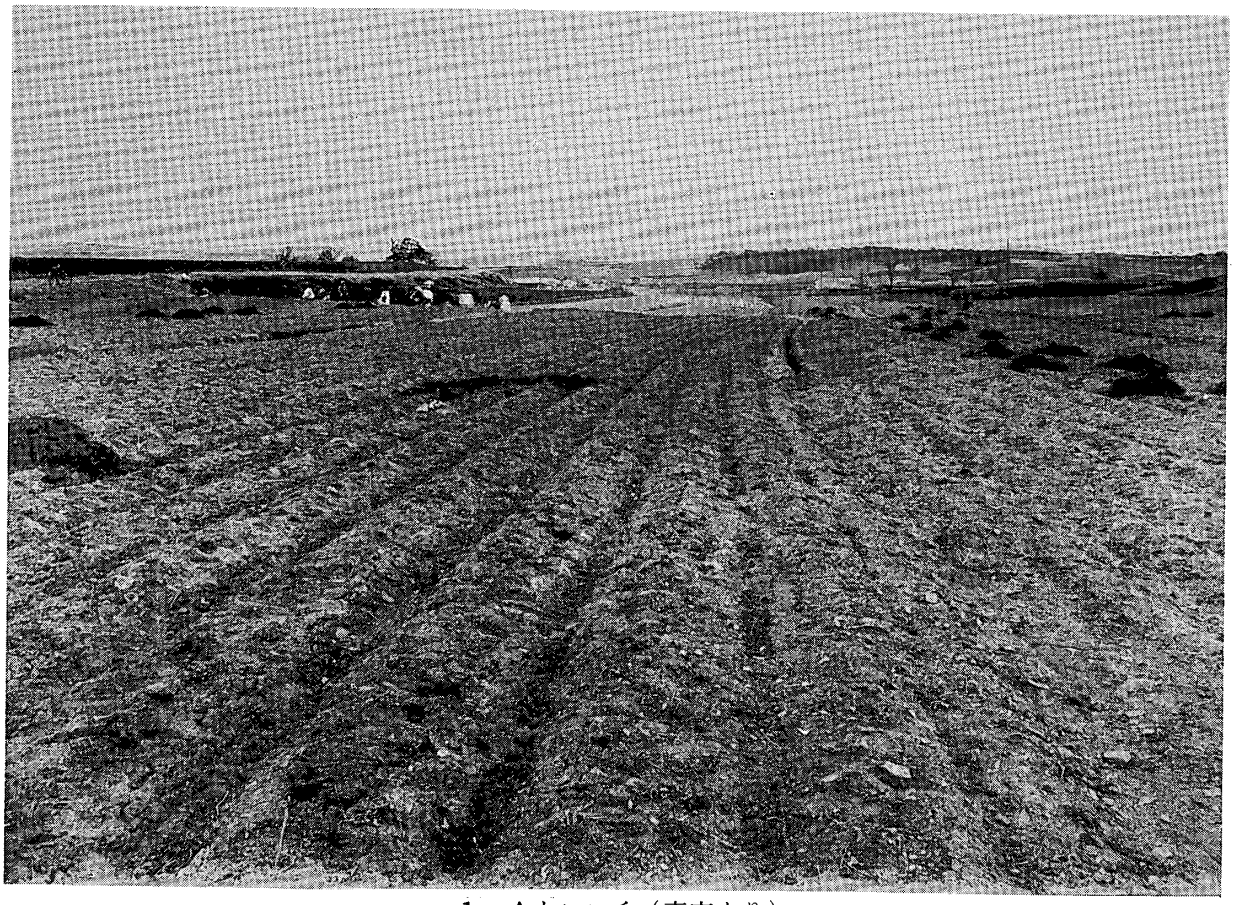


２．E′トレンチ（西より）



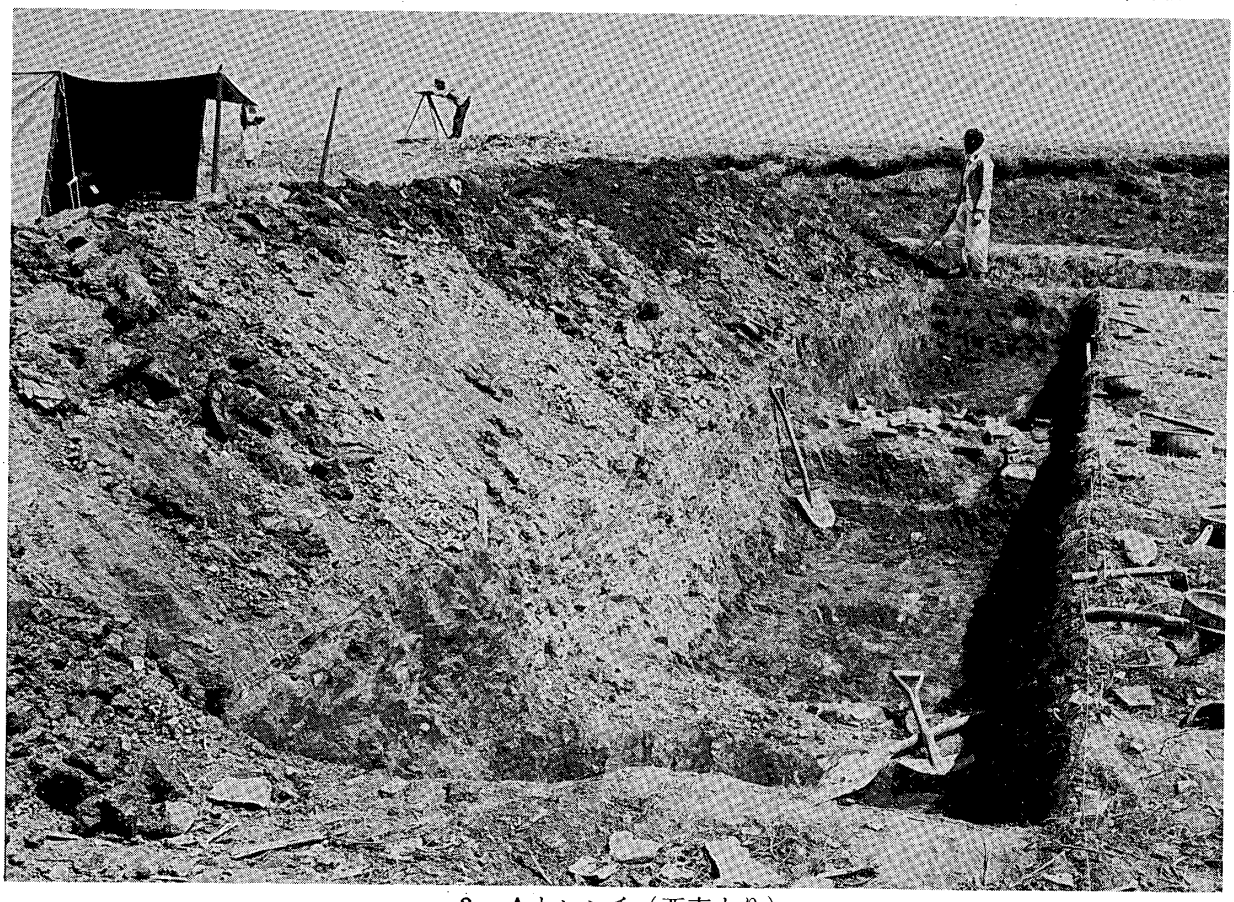
中央台地東側の発掘区一帯

（図版３—１）



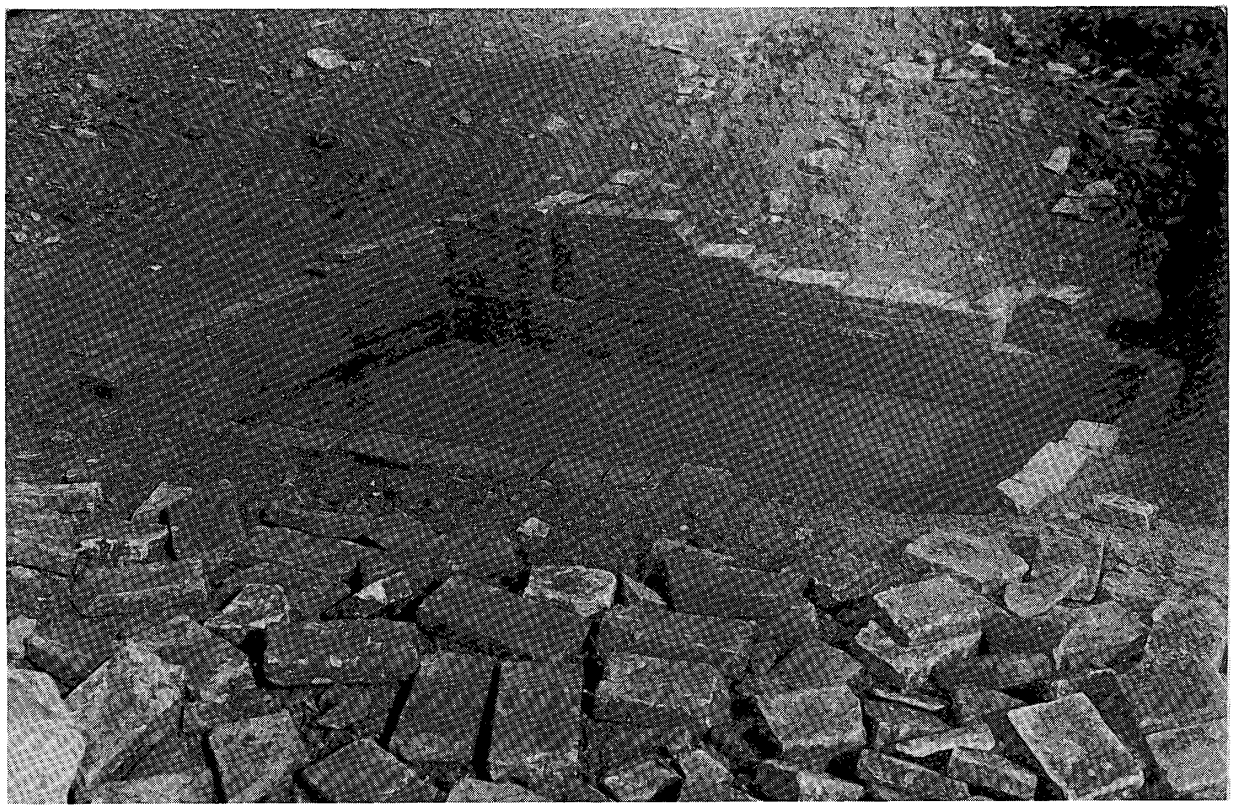
１．Aトレンチ（東南より）

（図版３—２）



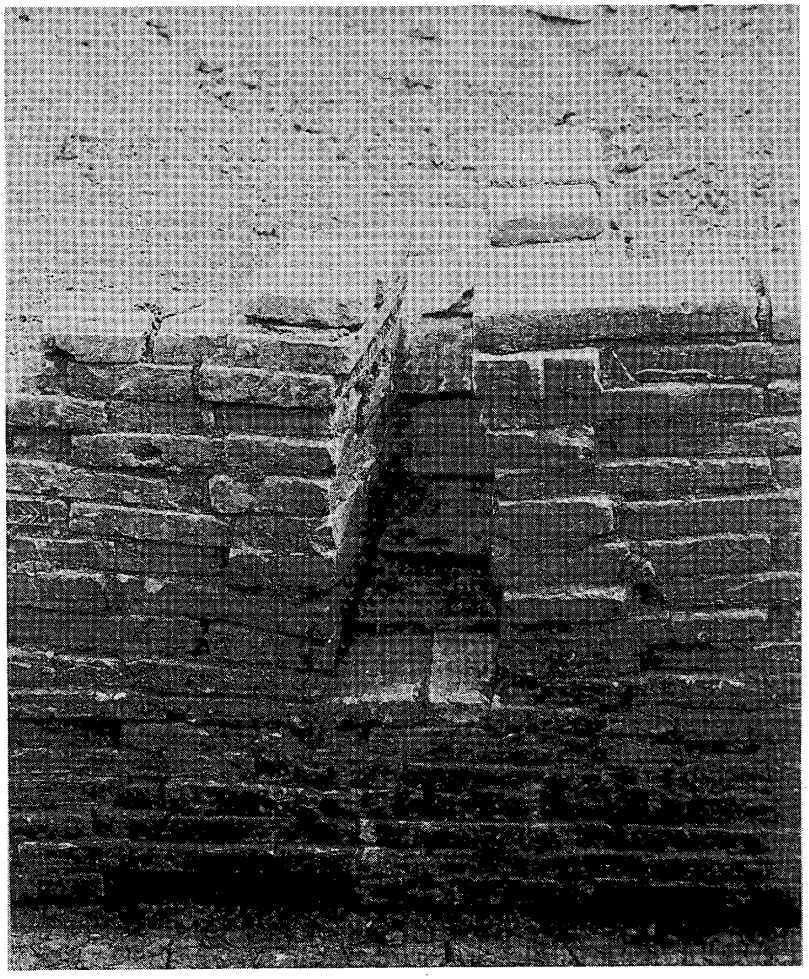
２．Aトレンチ（西南より）

（図版４—１）



１．Ｇトレンチ塼築遺構（東北より）

（図版４—２）



２．Ｇトレンチ塼築遺構（部分）

（図版５—１）

１．B′—B″トレンチ内塼敷遺構（西より）

（図版５—２）

２．B′—B″トレンチ内塼敷遺構

（図版６—１）

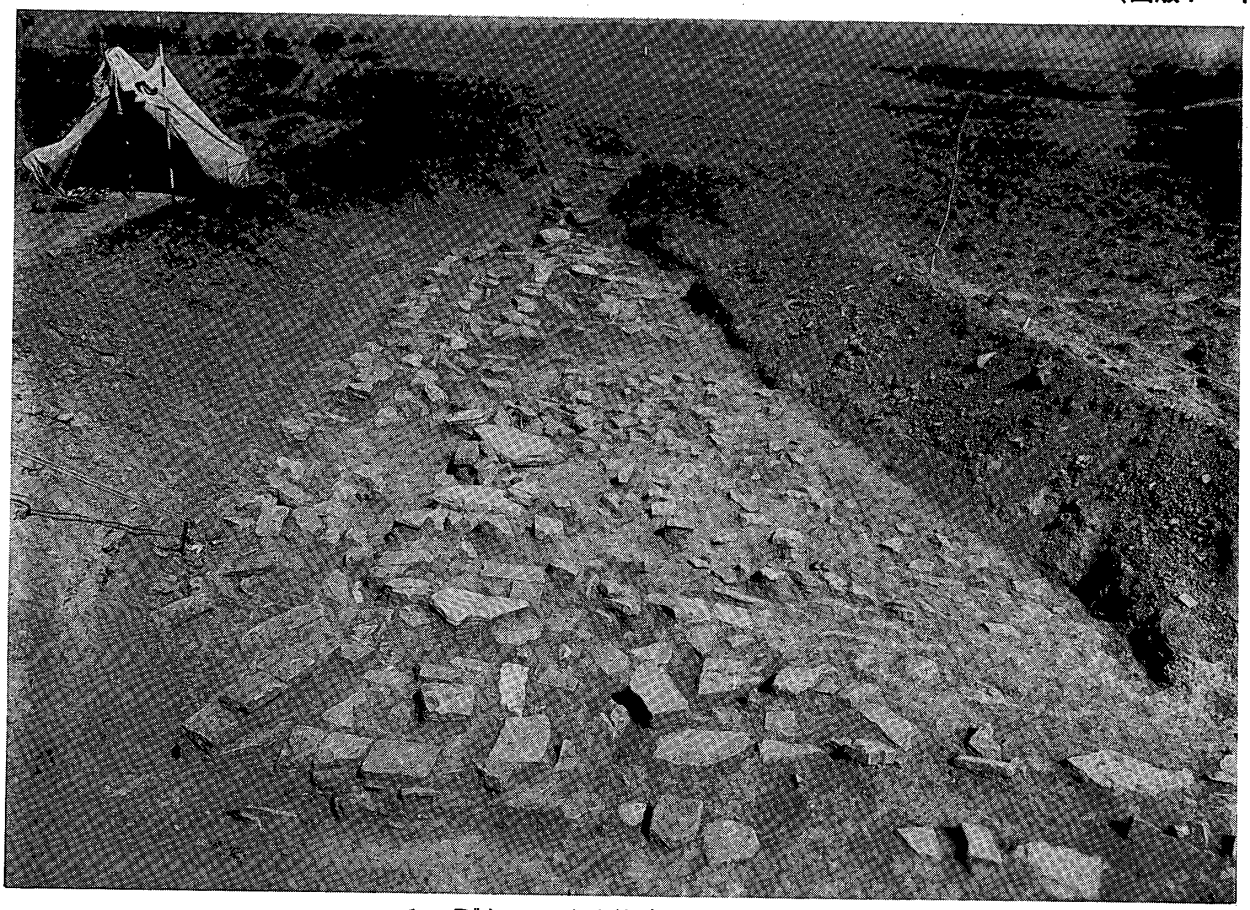
１．B″トレンチ建築遺構（北より、中央に鼎がみえる）

（図版６—２）

２．鼎出土状況

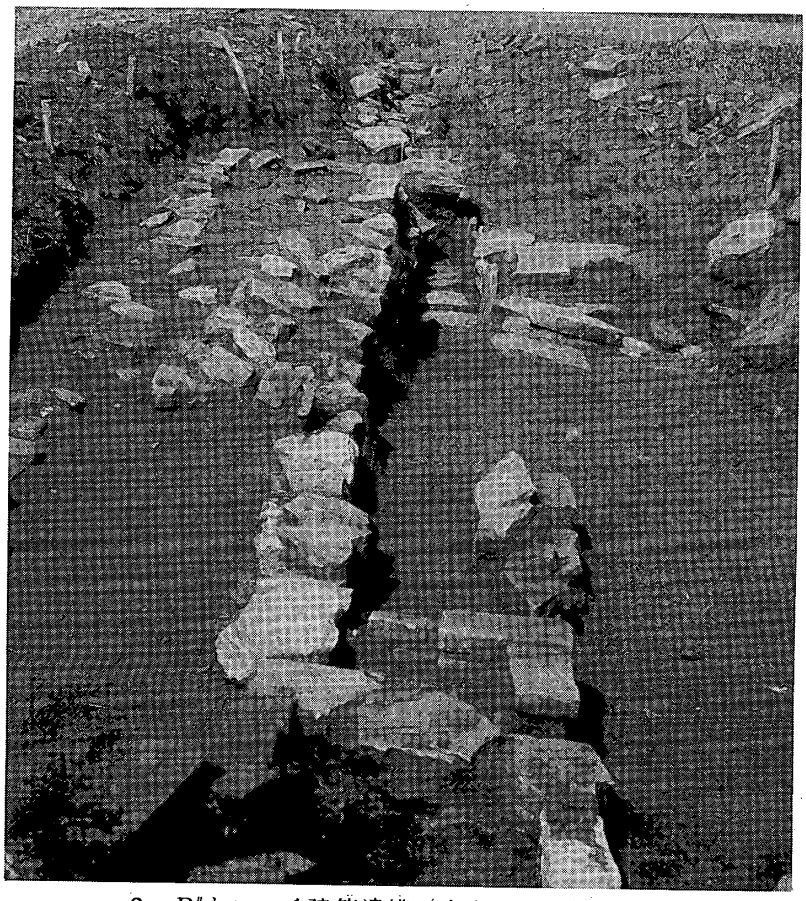
楽浪土城址の発掘とその遺構

（図版７—１）



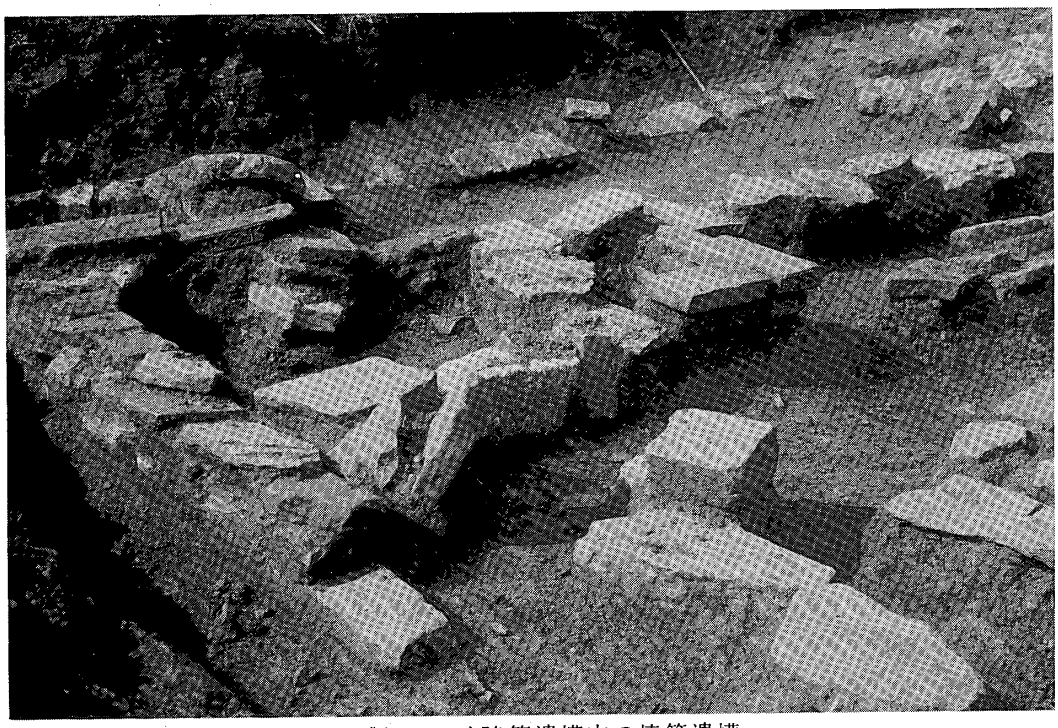
１．B″トレンチ建築遺構（南より）

（図版７—２）



２．B″トレンチ建築遺構（南より、発掘終了時）

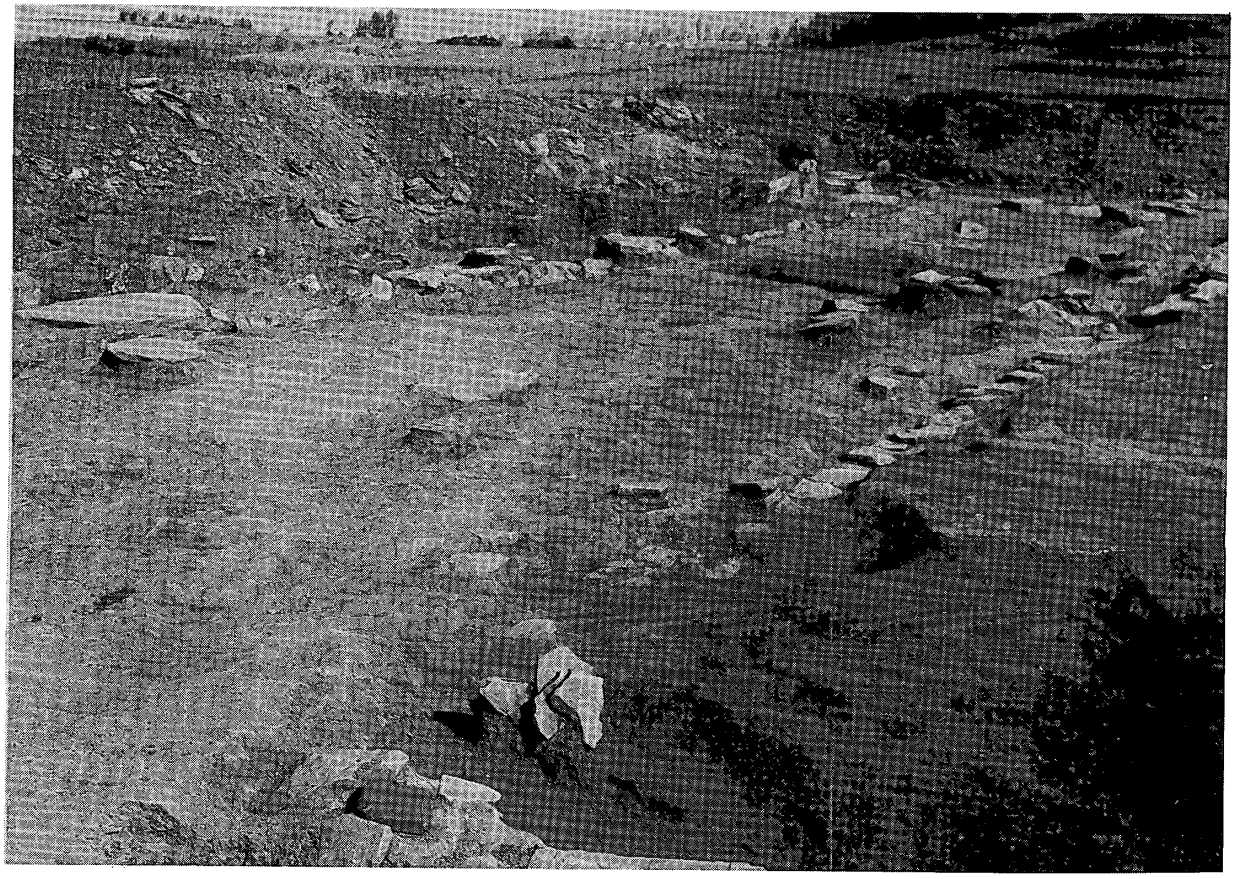
（図版８—１）



１．B″トレンチ建築遺構内の塼築遺構

（図版８—２）

２．B″トレンチ北部（北より）

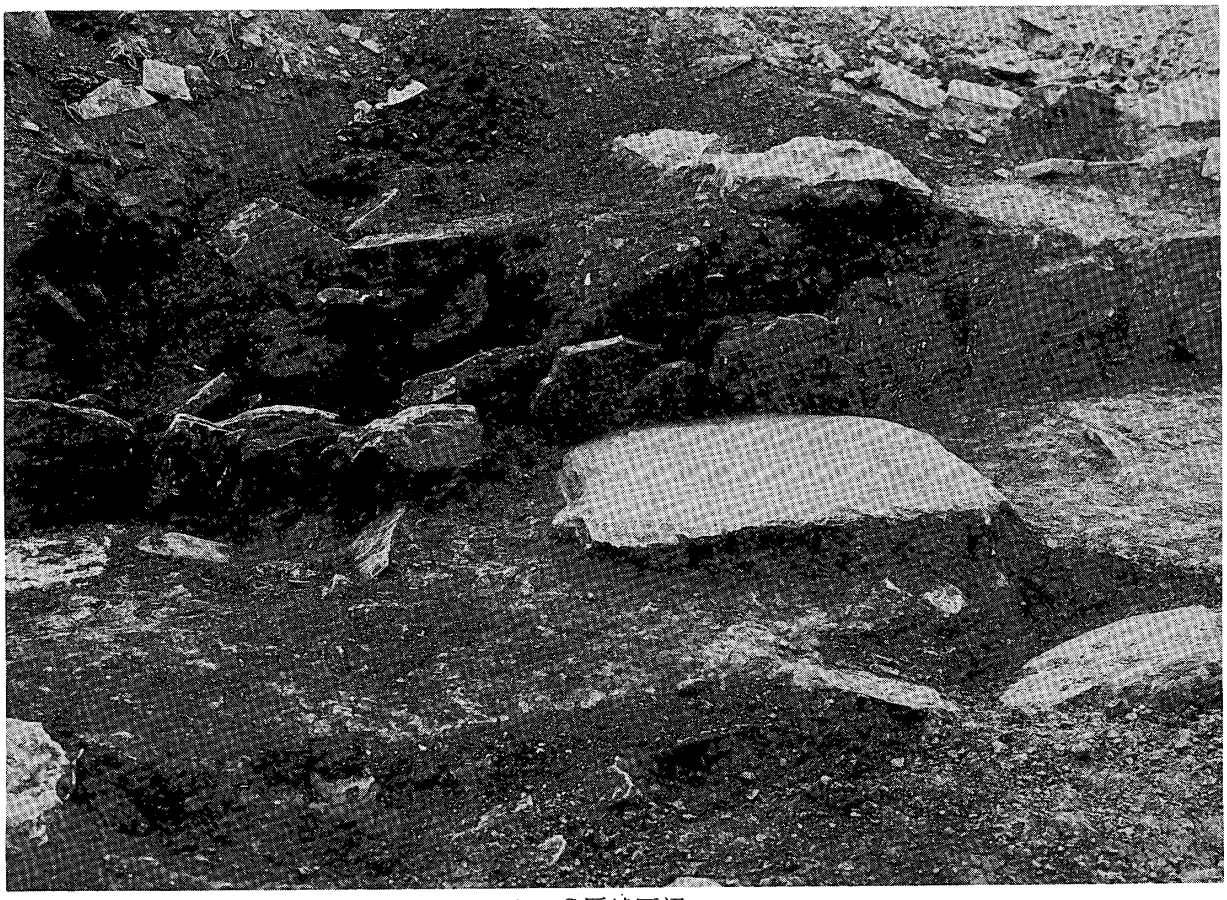


１．Ｇ区域（西南より）

（図版９—２）

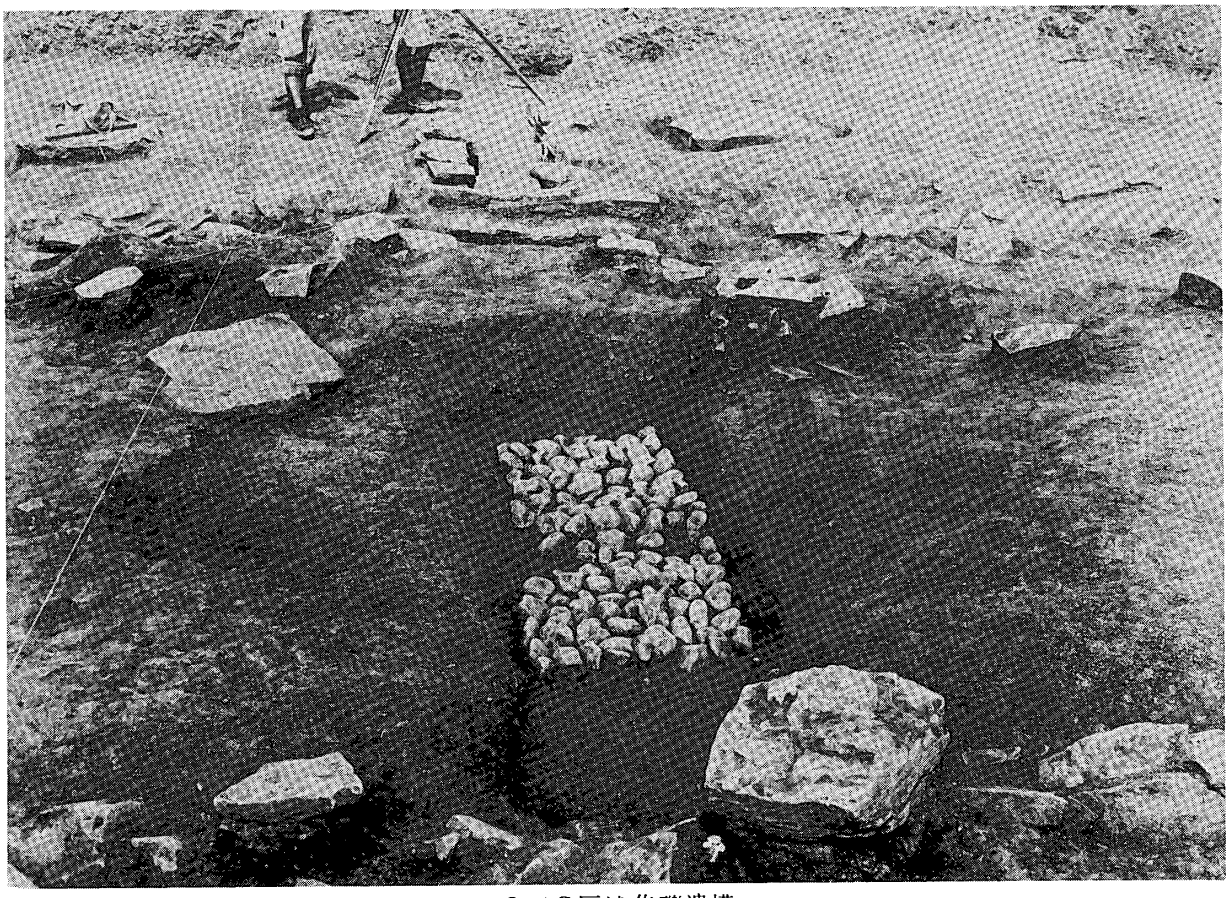
２．Ｇ区域（北より）

(図版10—1)



1．G区域西辺

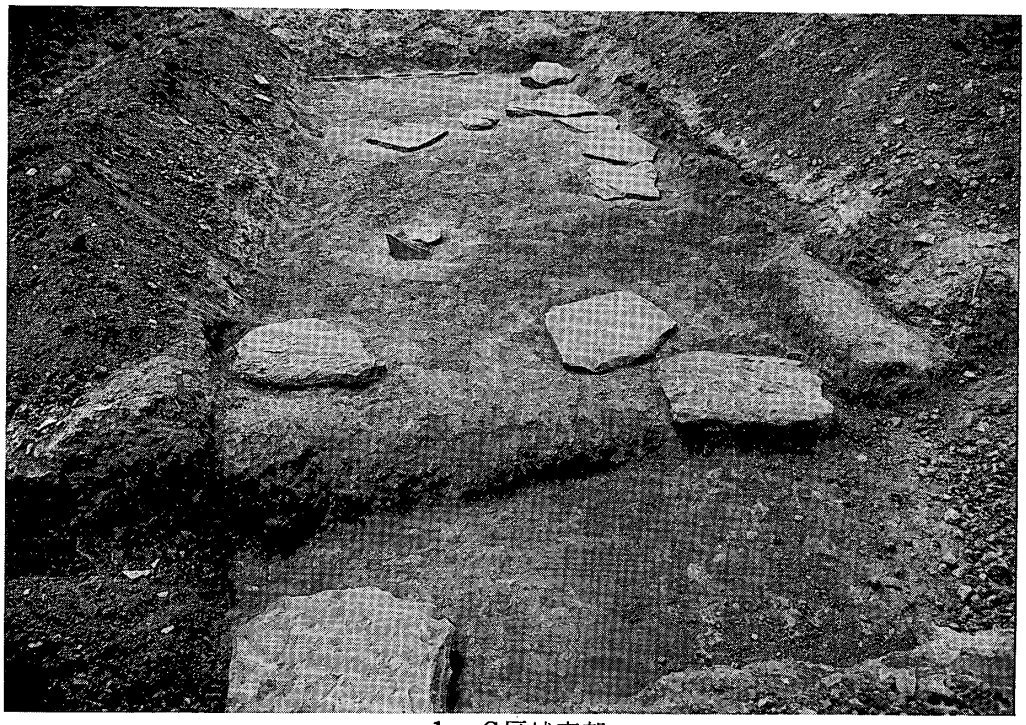
(図版10—2)



2．G区域集礫遺構

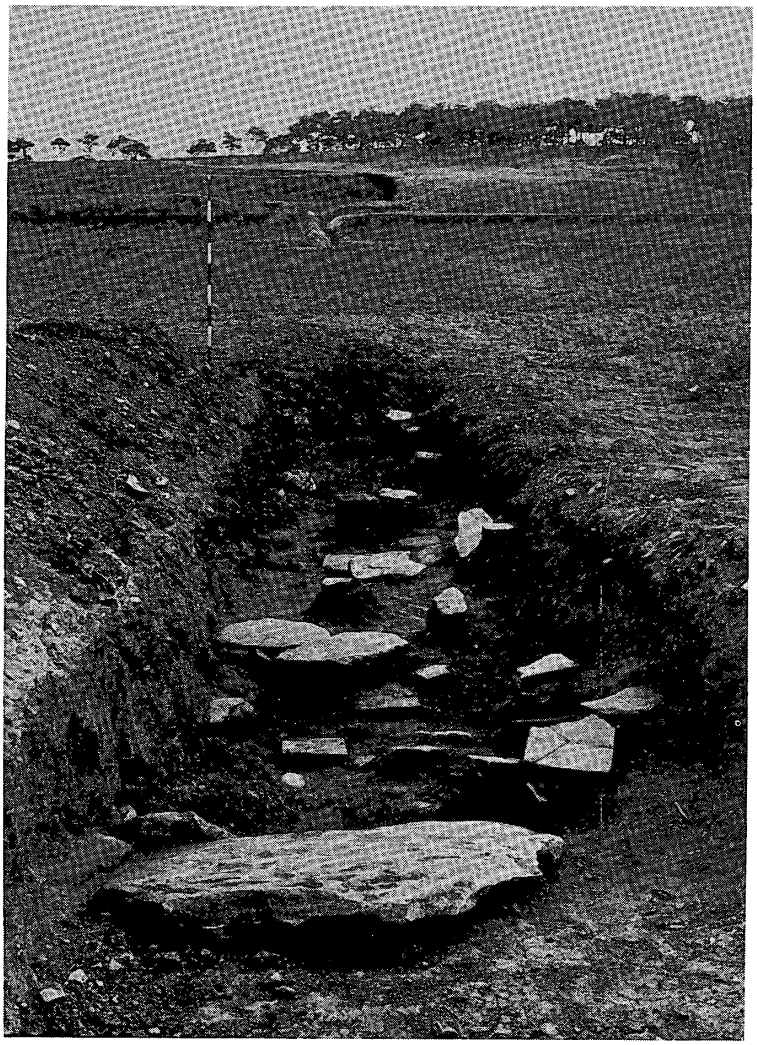
楽浪土城址の発掘とその遺構

（図版11—1）



1．C区域東部

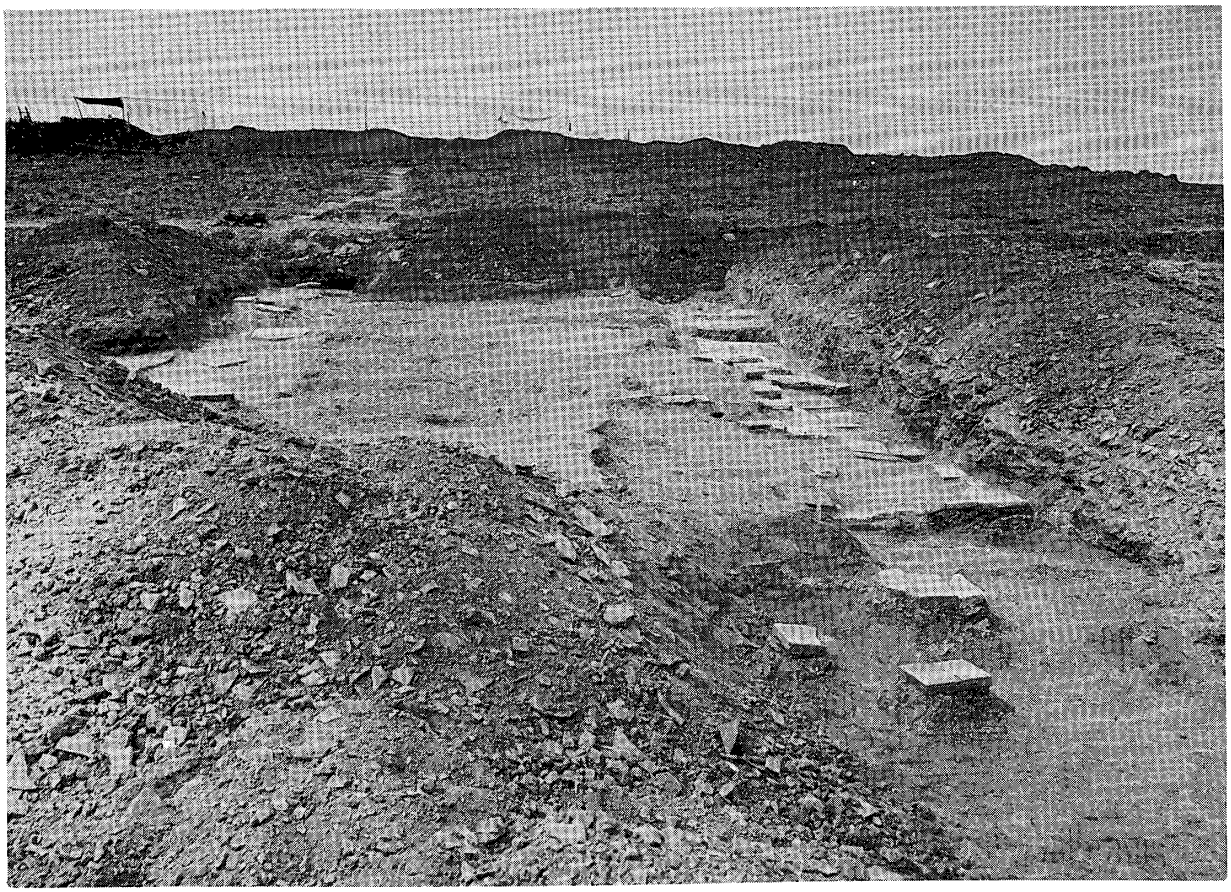
（図版11—2）



2．Cトレンチ（西より）

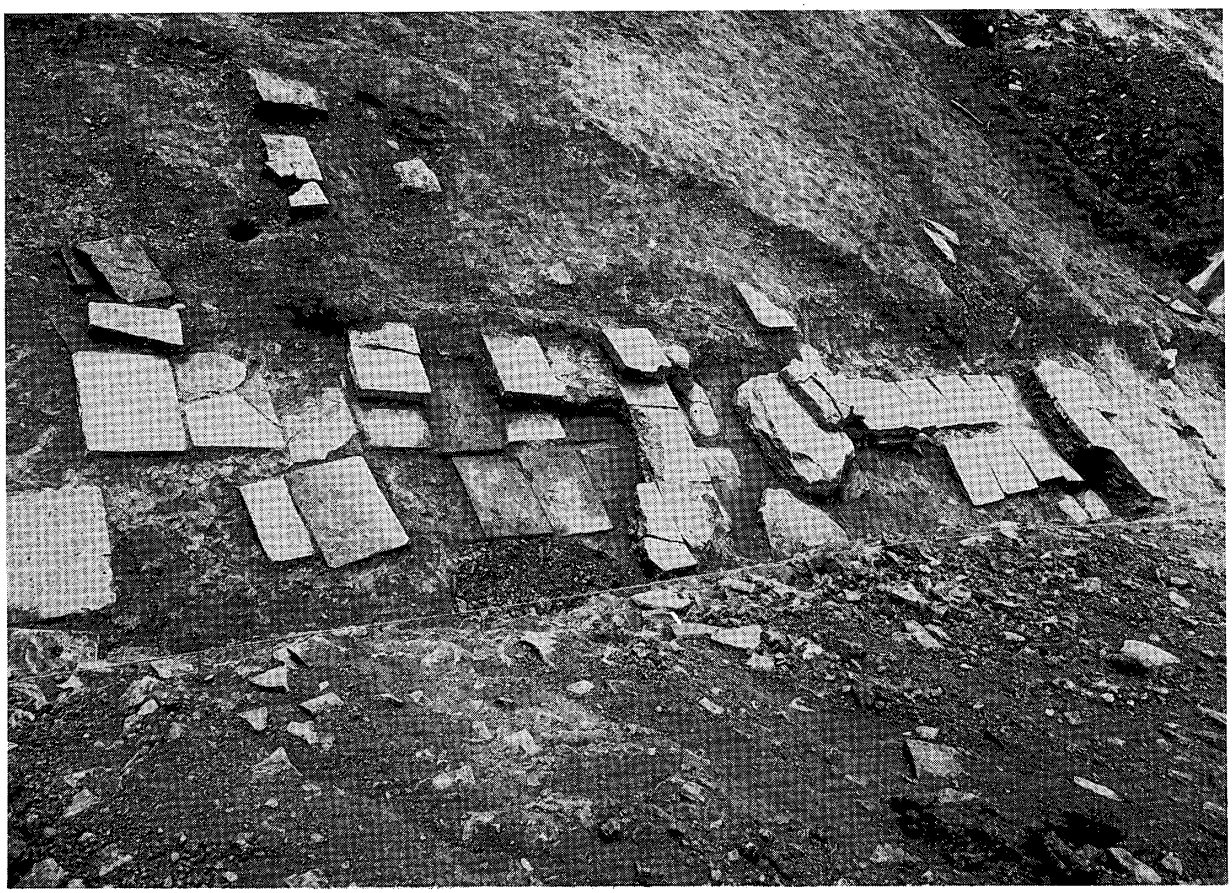
(図版12—1)

谷　豊信



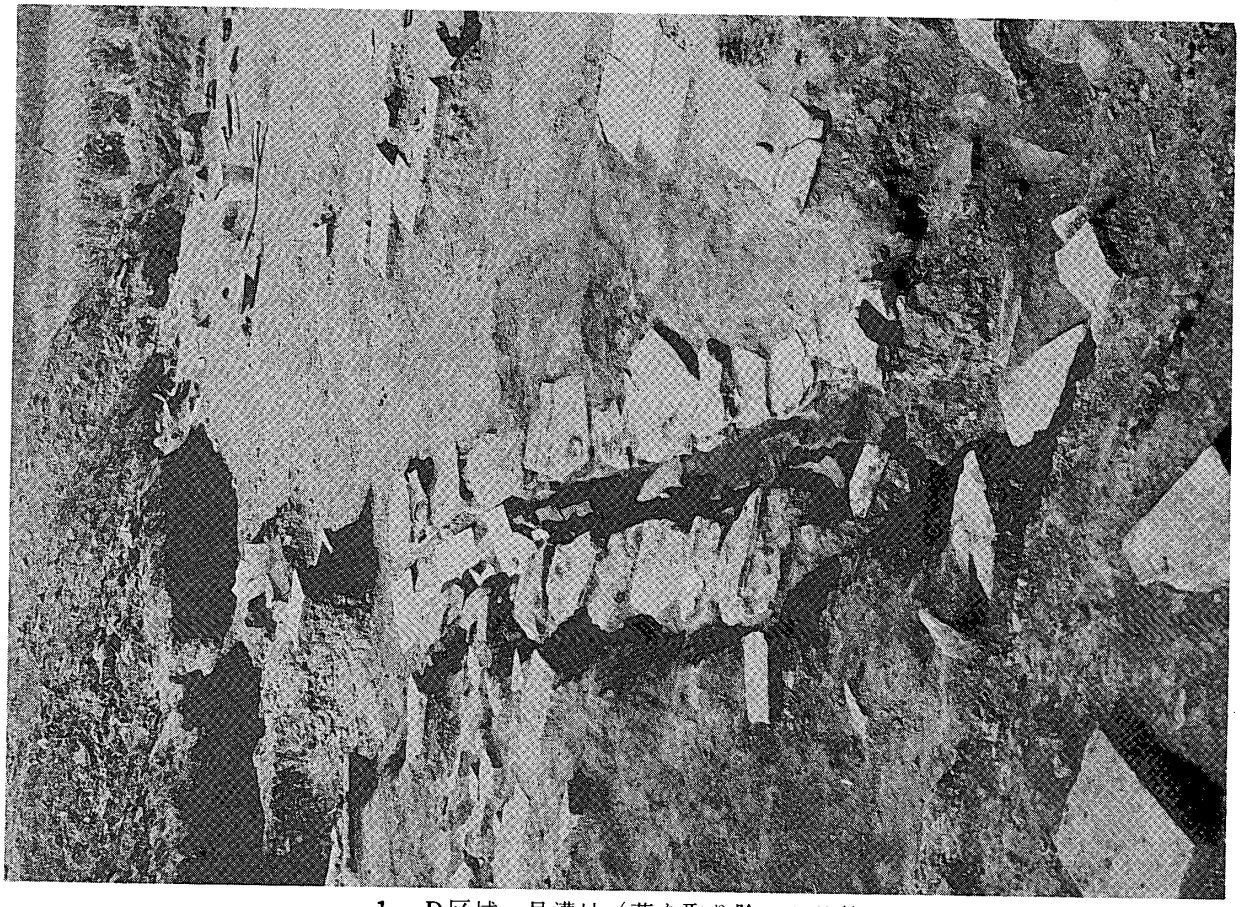
1．Cトレンチ、C－D、Dトレンチ（東北より）

(図版12—2)



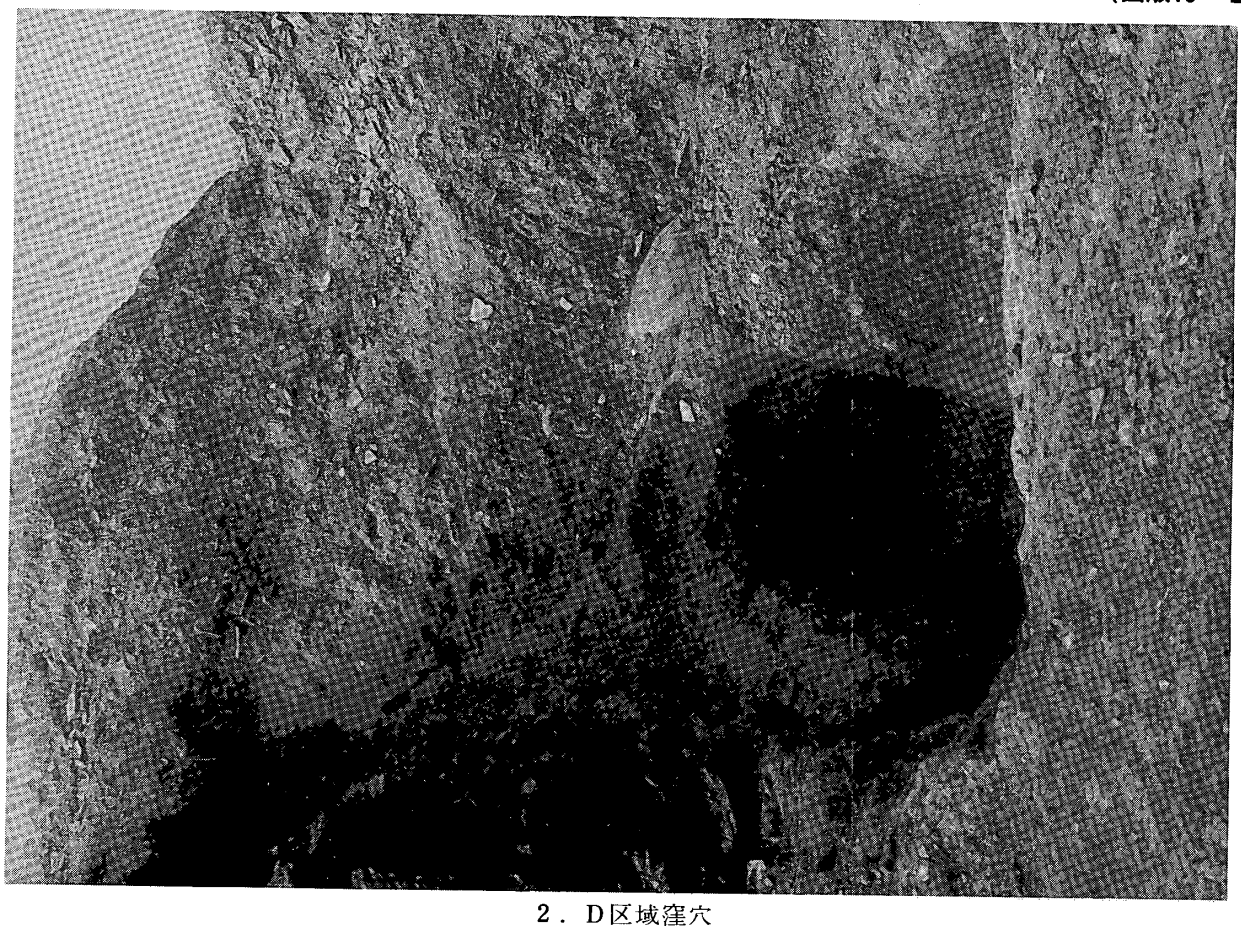
2．Dトレンチ塼敷遺構

（図版13—1）



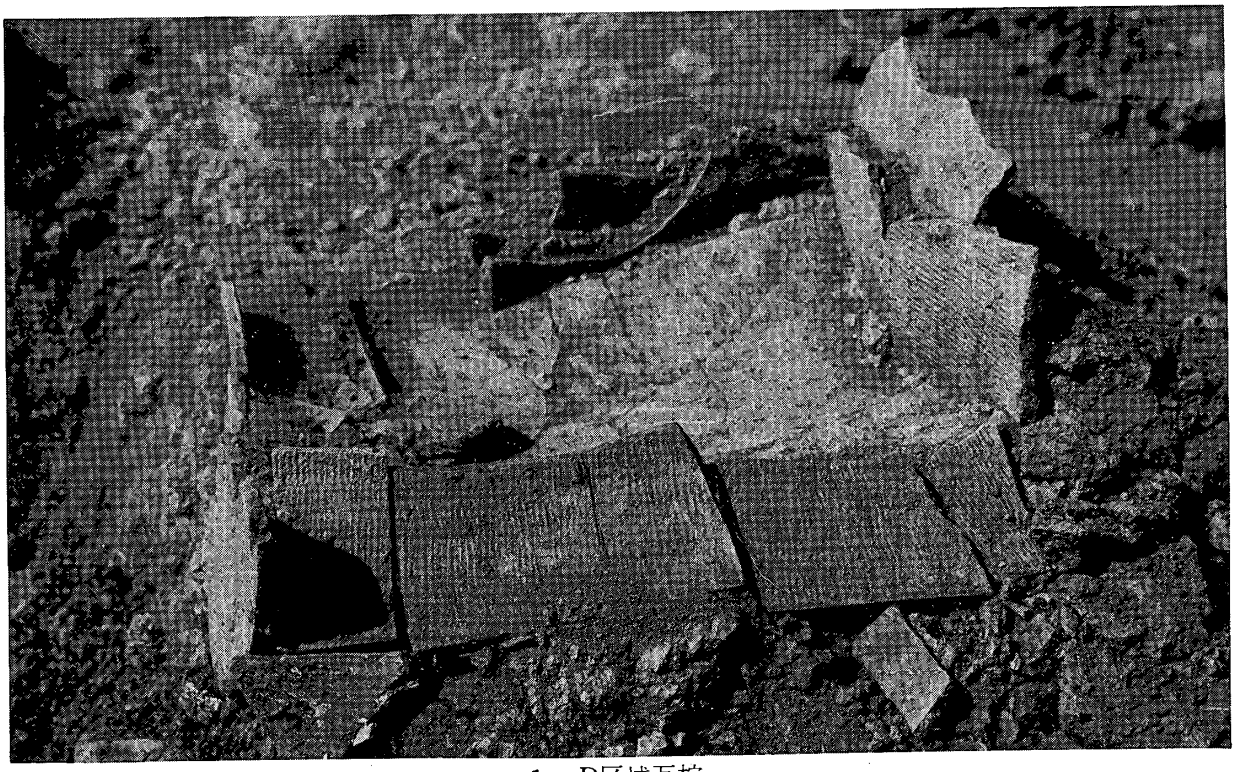
1．D区域一号溝址（蓋を取り除いた状態）

（図版13—2）



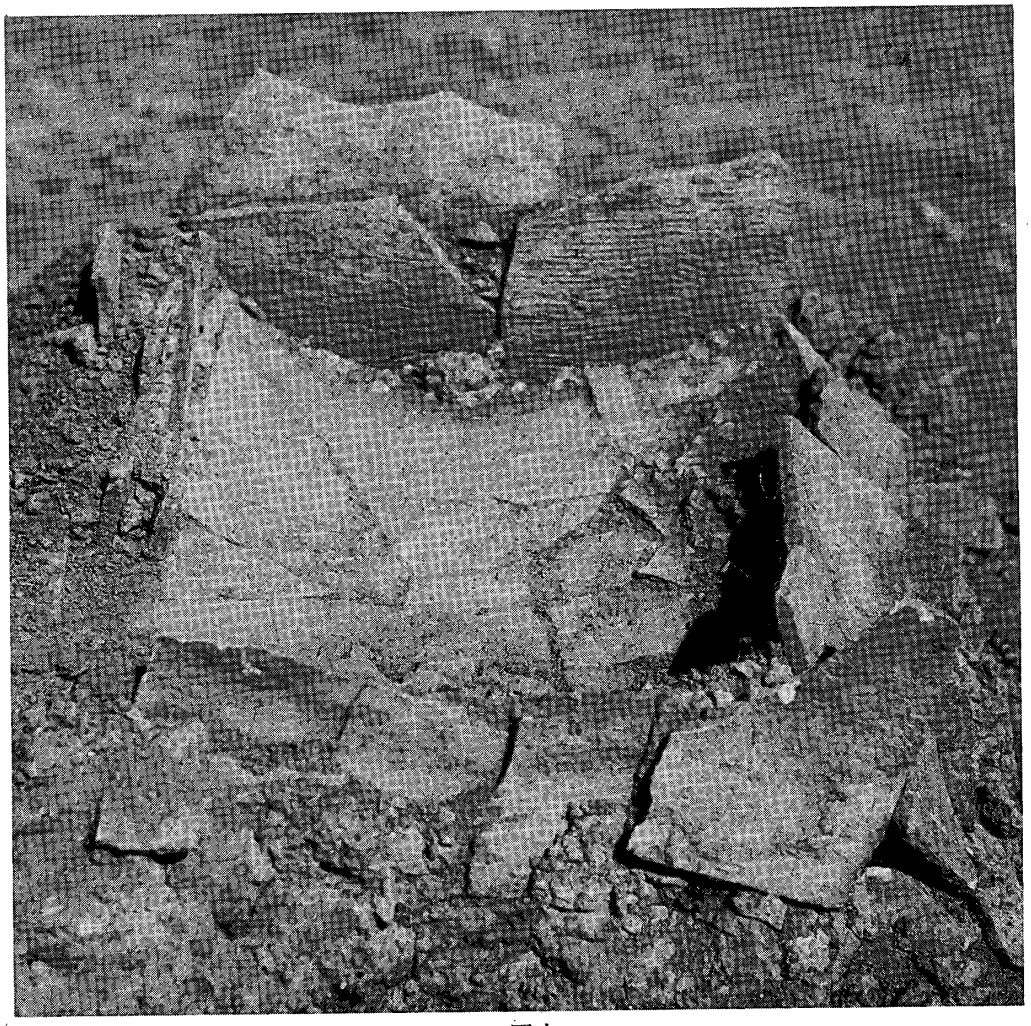
2．D区域窪穴

（図版14—1）



1．D区域瓦棺

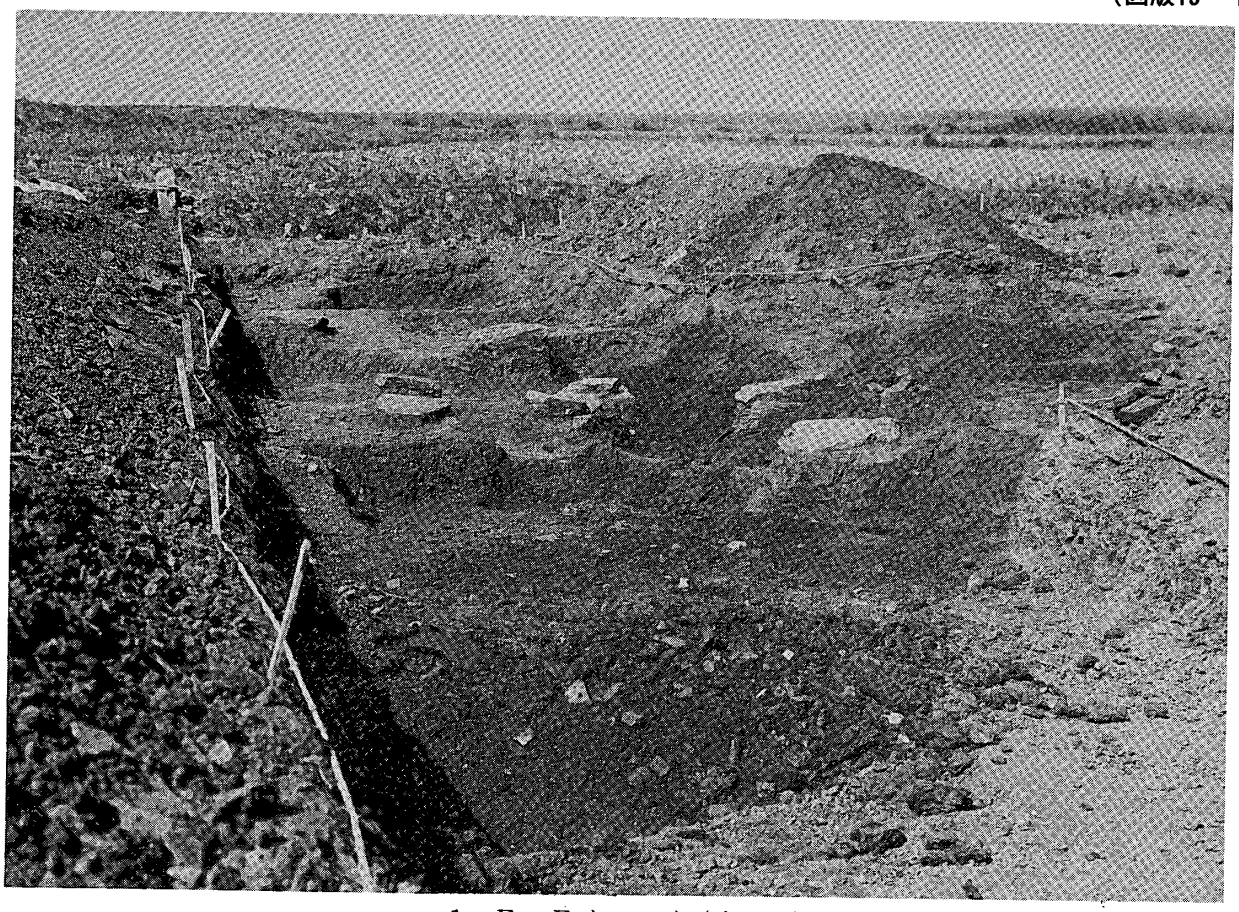
（図版14—2）



2．同上

楽浪土城址の発掘とその遺構

（図版15—1）

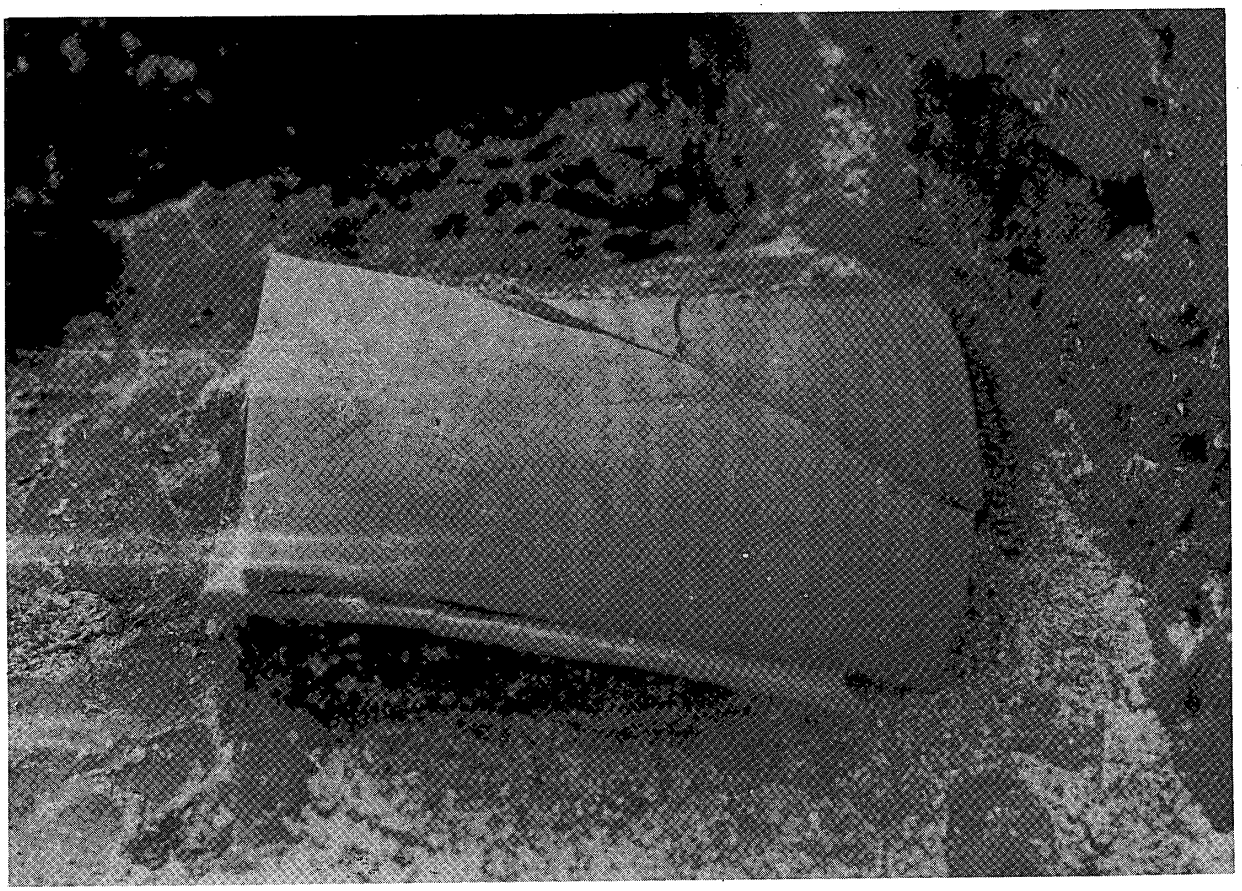


1．F_1・F_2トレンチ（東より）

（図版15—2）

2．F_3トレンチ溝址（北より）

(図版16—1)



1．ホリンゴール土城の瓦棺

(図版16—2)

2．同上